

阪大 ー地域に生き世界に伸びるー

NOW



2

OSAKA UNIVERSITY 2011/No.123

トピックス

第3回
大阪大学21世紀懷徳堂シンポジウム ー街育てvol.3

「大阪万博40周年の検証」 人類は進歩したのか 調和したのか

クローズアップ
学際融合教育プログラムの推進に向けて
学際融合教育研究センター

2011 2月号

No. 123

目次

トピックス	2
クローズアップ	4
役員室だより	8
ナウススペシャル	24
キャンパスニュース	26
表彰等	54
人事	62
訃報	64
インフォメーション	65
職員インタビュー	67
海外拠点だより	68
交流協定大学	70
クラブ&サークル	71
トピックス	72



表紙写真：タイガー手廻し計算器

(寸法：たて 17cm よこ 21cm 高さ 13cm、
重さ：約 8.9 キロ)

自然科学を記述する言語である数学を用いて未知の現象を解明する際に、計算の果たす役割は大きい。具体的な計算を実行することで、全く新しい世界が目前に開けることすらある。現在のようなコンピューターが普及する前の一時期には、大量の計算を正確に行うための簡便な道具として、機械式計算機が使われていた。

写真は終戦直後に製造された国産の手廻し計算機で、加減乗除やべき乗などが計算できる。今となっては電卓と同程度の計算能力だが、当時は非常に強力な道具であった。60年以上を経た現在でも完全に動作し、それを可能にした職人の技と心意気を通して、我々の想像力を刺激し続けている。

(理学部数学教室所蔵：タイガー計算器株式会社
昭和 21 年製 No.54561)

表紙デザイン：株式会社ココティエ

第3回

大阪大学21世紀懐徳堂シンポジウム 一街育て vol.3

「大阪万博 40 周年の検証」 人類は

12 月 12 日（日）第 3 回大阪大学 21 世紀懐徳堂シンポジウム 一街育て vol.3 「大阪万博 40 周年の検証」を、毎日新聞大阪本社ビル「オーバルホール」において開催しました。

街育てシリーズの 3 回目となる今回は、その集大成として、大阪万博から 40 周年にあたる節目の年に、万博が大阪の街に与えた様々な影響などを通じ、街の在り方や当時直接携わった方々の体験談をもとにした未来都市構想などを、様々な分野の方々とともに検証を深めることとしました。

(財)日本万国博覧会記念機構および毎日新聞社の後援を受け、約 360 名が参加する大変盛況なシンポジウムとなりました。会場には、万博当時のパビリオン写真やポスター、貴重な万博グッズが展示され、当時の雰囲気を懐かしむ参加者も大勢おられました。





進歩したのか 調和したのか

シンポジウムは2部構成で、第1部では大阪万博に携わった上田篤氏（建築学者：元大阪大学工学部教授）、小松左京氏（作家・大阪万博テーマ館サブ・プロデューサー）、今井祝雄氏（美術家・元具体美術協会会員・成安造形大学教授）の3名の方々の映像インタビューが放映され、当時の世論も含め、日本全国が盛り上がった大阪万博の意義などについて、それぞれの視点から裏話も含めての興味深い話が語られました。

第2部では、学外から磯 達雄氏（建築ジャーナリスト）、小田マサノリ氏（元・現代美術家、メディア・アクティヴィスト）、嘉門達夫氏（万博マニア・歌手）、※竹村真一氏（文化人類学者・京都造形芸術大学教授）、西田隆政氏（国語学者：甲南女子大学教授）のいわゆる万博世代でもある5名のパネリストを迎え、

学内からは、鷺田清一総長、金水 敏コミュニケーションデザイン・センター長、菊池 誠サイバーメディアセンター教授、小浦久子工学研究科准教授、橋爪節也総合学術博物館教授、永田 靖文学研究科教授を加え、門村幸夜産学連携推進本部特任准教授の司会により、テーブルを囲みタウンホールミーティングを開催しました。（※竹村真一氏は、急遽都合により欠席のためビデオレターによる出演）

パネリスト、学内参加者の大阪万博当時の関わりや現在の専門分野からの分析などを通して、大阪万博について意見交換が行われ、会場の一般来場者のみなさまと一緒に、大阪の街は「進歩し、調和して」大きく育ったのかを検証しました。

（大阪大学 21 世紀懐徳堂）



学際融合教育プログラムの推進に向けて

学際融合教育研究センター

平成21年度に発足した「学際融合教育研究センター」は、研究科の枠を超えた学際融合教育プログラムの企画・提案及び実施支援を行う組織です。

学際融合教育プログラムは、「複眼的視野とグローバルな視点を有する指導的な人材の輩出」をめざす教育システムであり、他大学に先駆けた大阪大学の特色のひとつ¹⁾ になっています。

ここでは、この特色ある教育システムについて紹介するとともに、これを支える本センターの取組みも併せて紹介させていただきます。

学際融合教育プログラムとは

「学際融合教育プログラム」とは、上述のとおり、複眼的視野とグローバルな視点を学生の方々に持ってもらうために考えられた教育システムです。特に、この「複眼的視野」というのがキーワードとなります。

「複眼的視野」とは、事象や現象を様々な視野・視点から科学的に捉え、理解することを意味します。この「複眼的視野」を涵養するためには、自身の専門的領域とは異なる領域での「研究や学びの方法、考え方」を知り、理解すること、また同じ課題への異なる専門領域の取組みを学び、理解することが、重要であると考えます。

このような複眼的視野を涵養するプログラムとして、高度副プログラムと副専攻プログラムを構築しました。これら2つのプログラムをあわせて、学際融合教育プログラムと呼んでいます。

学際融合教育プログラムは、全大学院生が所属する研究科によらず他分野の学びを可能とし、学際的な素養を涵養するものであり、本学の大学院生に是非とも受講して頂きたいプログラムです。平成20年度から高度副プログラムが開始されており、平成23年度からは副専攻プログラムを開始する予定です。

なお、社会人の方々を対象とした高度プログラムを平成20年度から開講しています。これは、正式には「大学院科目等履修生高度プログラム」と呼ばれ、現在のところ、高度副プログラムを社会人向けに開講したプログラムとなっており、学校教育法105条にも位置づけられたプログラムです。これに

ついては、紙面の都合上割愛させていただきますので、詳しくは本センター HP²⁾ を参照ください。

高度副プログラムとは

高度副プログラムは、正式には「大学院等高度副プログラム」と呼びます。受講対象者は全大学院生ですが、平成23年度からは学部の5、6年生も受講可能なプログラムを提供できるようになり、名称に「大学院等」というように「等」が記載されています。

表1のとおり、プログラム数は年々増加しており、様々な選択肢が学生に用意されるようになりました。

学際融合教育プログラムは、一つの教室に様々な研究科の学生が集まり、講義や実習、ディスカッションを通して意見交換を行い、連携を強めることができる場となっており、互いに刺激し合える環境を作っています。図1は平成22年度の申請者数（延べ人数）を所属研究科別に集計したものです。プログラムによる違いはあるものの、コミュニケーションデザインのように、複数の研究科の学生が同じプログラムを受講していることが分かります。

では、プログラムを受講している学生数について、表2を参照ください。平成21年度は数字が伸びていますが、平成20年度と22年度はそれほど変化ありません。ただ、22年度には、特徴としてDCの申請者数が伸びており、これはDC向けのプログラムが拡充されたためであると思われます。また、表には挙げていませんが、平成22年度のMC申請者のうち

表1：年度別高度副プログラム数

年度	20	21	22	23
高度副プログラム数	14	20	27	35

注：平成23年度は予定です。

表2：年度別高度副プログラム申請者数

年度	20	21	22
MC (修士)	505	576	511
DC (博士)	22	39	54
合計	527	615	565

注：申請者数は延べ人数です。

10/11/25集計

プログラム名称	提案部局	受講対象者	課程	文学	人間科学	法学	経済学	理学	医学系(医)	医学系(保)	歯学	薬学	工学	基礎工学	言語文化	言語社会	国際公共	情報科学	生命機能	高等司法	連合小児発達	小計	合計
1 ERASMUS MUNDUS英語授業・現代日本論	文学研究科	M・D	M																			0	0
2 アート・メディア・テクノロジー入門講座－理論と実践	文学研究科	M	D	3			1	1					1		1							7	7
3 医学修士の健康医療問題解決能力の涵養	医学系研究科(医学専攻)	M	M						12	1												13	13
4 高度がん医療人材育成プログラム	医学系研究科(保健学専攻)	M・D	M							1												1	1
5 まちづくりデザイン学	工学研究科	M	M		2								13									15	15
6 環境リスク管理学	工学研究科	M	M		1			1					9	1				2				14	14
7 高度溶接技術者プログラム	工学研究科	M・D	M										22									22	22
8 学際光科学	工学研究科	M・D	M					4					12	1								17	17
9 光通信及びフォトニックネットワーク工学	工学研究科	M	M																			0	0
10 認知脳システム学	基礎工学研究科	M・D	M		5								15	6				2				28	38
11 言語情報処理の手法と展開(旧応用自然言語処理理論と技術)	言語文化研究科	M・D	M		6				1				3									10	10
12 グローバルリーダーシップ・プログラム	国際公共政策研究科	M・D	M										1	1								2	2
13 IT Spiral	情報科学研究科	M1	M															10				10	10
14 高度情報ネットワーク実践スペシャリスト	情報科学研究科	M	M															1				1	1
15 感染症学免疫学融合プログラム	微生物病研究所	D	M																			0	20
16 インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践	国際教育交流センター	M・D	M		1										8							9	9
17 臨床工学・情報学融合領域の人材育成教育プログラム：専門科	臨床工学融合研究教育センター	M・D	M						4	17		3	15	8				8				55	57
18 臨床工学・情報学融合領域の人材育成教育プログラム：高度職業人育成科	臨床工学融合研究教育センター	M・D	M					1	3	8		1	1									14	14
19 コミュニケーションデザイン	コミュニケーションデザイン・センター	M・D	M	3	8		2	7	2	5			7	12	1			4	1			52	59
20 金融・保険	金融・保険教育研究センター	M・D	M				24	33					2	19				8				86	91
21 グローバル共生	グローバルコラボレーションセンター	M・D	M		7					3	4				5							19	21
22 人間の安全保障と開発(旧人間の安全保障・社会開発)	グローバルコラボレーションセンター	M・D	M		21	1	4	1	3	5		3	2		4		1	1				46	49
23 司法通訳翻訳論	グローバルコラボレーションセンター	M・D	M		7	5			1			1			6		2					22	24
24 現代中国研究	グローバルコラボレーションセンター	M・D	M		4	3	1			1					1							10	11
25 サステナビリティ学	サステナビリティ・サイエンス研究機構	M・D	M		1				2				10		1			1				15	15
26 ナノサイエンス・ナノテクノロジー高度学際教育研究訓練プログラム(博士前期課程高度学際教育)	ナノサイエンスデザイン教育研究センター	M	M					9					25	19								53	53
27 ナノサイエンス・ナノテクノロジー高度学際教育研究訓練プログラム(博士後期課程社会人特別選抜)	ナノサイエンスデザイン教育研究センター	D	M																			0	0
合計			M	6	57	9	32	57	30	42	0	8	135	67	27	0	3	37	1	0	0	511	
			D	1	10	0	3	1	21	0	1	1	6	1	5	1	0	1	2	0	0	54	
			計	7	67	9	35	58	51	42	1	9	141	68	32	1	3	38	3	0	0	565	

図1：平成22年度大学院高度副プログラム申請者数

約9割はM1の申請者であり（M1申請者457名）、M1の学生のうち、約2割が申請していることになります。

高度副プログラムは始まったばかりで、傾向をつかむのは難しいのですが、申請者数自体はそれほど変化なく推移しているように思えます。これは、プログラム数が増えているのと対照的です。今後、申請者数を増やすよう広報活動を拡充していく必要があると考えています。

次に、高度副プログラムの修了条件を挙げておきます。

- ① 高度副プログラムは、プログラムごとに定める要件を満たすことで、所属する大学院の課程を修了（博士課程・博士後期課程の場合、単位修得退学を含む）する際に、プログラムの修了認定証が交付されます。
- ② プログラムの修了のためには、所属する研究科の修了要件単位数30単位（博士前期課程の場合）に加えて、プログラムの修了要件単位数8単位以上を取得する必要があります。
- ③ プログラム修了要件科目が所属研究科の修了要件科目と重なる場合、研究科での単位がプログラム修了単位として認められることがあります。その場合最低4単位は研究科の修了要件に含まれない科目からの取得が必要となります。

表3は、プログラムを修了した学生数を示したものです。大学院生は在学中にいつでもプログラムを申請できるため、21年度修了者がすべて20年度に申請した学生であるとはいえませんが、単純に21年度修了者がすべてM2であり、その学生がすべて20年度つまりM1時点で申請したとするならば、申請者の約5割の学生が修了したと言えます。この数字の大小については議論があると思いますが、この数字を少しでも上げていくことも課題だと考えています。

表3：高度副プログラム修了者数

修了者数	20	21
MC	144	219
DC	0	5
合計	144	224

副専攻プログラムとは

副専攻プログラムは、正式には「大学院副専攻プログラム」と呼びます。高度副プログラムと異なり、学部5、6年生には開講されておらず、自身の所属する主専攻に準じたより密度の高い内容として大学院生に特化したプログラムとなっています。

その密度の濃さは、修了条件に如実に表れています。図2を参照ください。修了条件が8単位から14単位に引き上げられています。このプログラムは平成23年度開始ということもあり、更なる充実を予定していますが、まずは単位数の違いを強調したプログラムとなっています。

なお、平成23年度には3つのプログラムが開始する予定となっています。

将来的に、この副専攻プログラムをどのような形にしていくのかを考えるのもセンターの役目ですが、これについては次のセンターの活動のところで少し方向性を述べたいと思います。

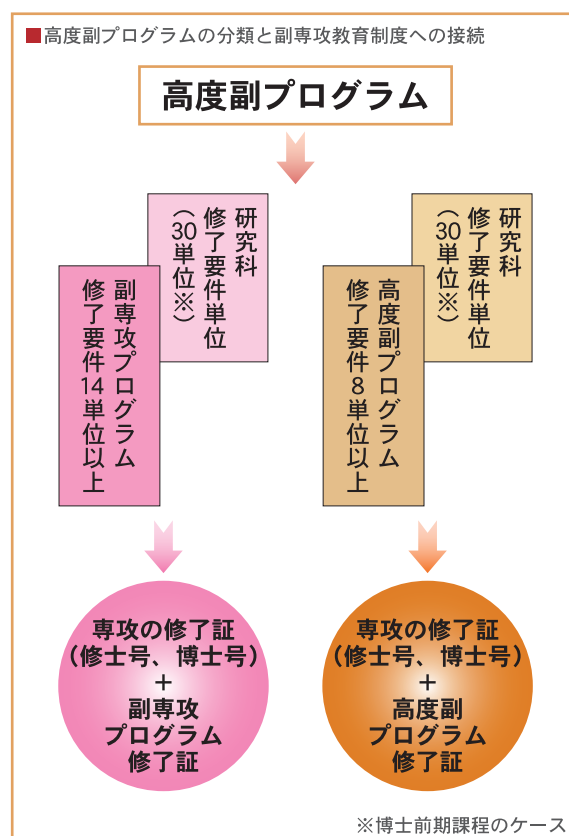


図2：高度副プログラムの分類と副専攻教育制度への接続

学際融合教育研究センターの活動

本センターの活動内容は大きく6つあり、どれも学際融合教育プログラムの推進・定着を目的としています。特に、副専攻プログラムの推進は本センターのミッションとなっています。

1. 社会ニーズの把握及び分析に基づく学際融合教育テーマの発掘と全学学際融合教育の企画

2. 学内部局・国内外大学との連携による学際融合教育プログラムの開発・実施

大学院生の受講にふさわしいテーマを発掘し、研究科や他大学を横断したプログラムを企画します。この企画には、学内の研究科やセンターの有識者を集めた「プログラム企画・開発会議」も加わります。平成 23 年度には教育・情報室と当センターが企画につとめた、「キャリアデザイン」や「国際標準化」等の高度副プログラムが開講される予定です。

3. 学際融合教育の充実した実施と大学院生の受講促進のための活動

シンポジウムやセミナーを開催し、学内外に向け学際融合教育プログラム推進の活動を行います。毎年 10 月頃に学生交流学際融合教育セミナーを、12 月頃に学際融合教育シンポジウムを開催しています。また、来年度には、高度副プログラム・副専攻プログラムの合同ガイダンスを次のとおり開催します。詳細が決定しましたら、改めてお知らせいたします。

(吹田) 日時：4 月 13 日 (水) 13:30-16:00

場所：理工学図書館 図書館ホール (3 階) 及び
ギャラリーゾーン (2 階)

(豊中) 日時：4 月 15 日 (金) 13:30-16:00

場所：総合図書館 図書館ホール (6 階)

4. 高度副プログラム制度を通じた副専攻教育制度の設計と確立

副専攻プログラムを次の段階としてどのように進めるかの設計を行い、その確立を目指します。

5. 学際融合教育基盤の整備

学際融合教育プログラムのスムーズな運営のため、学内制度の設計・整備、学務情報システム等の基盤整備を行っています。特に、学際融合教育支援システムの開発・導入が、一番大きな成果であると考えています。このシステムは 2 つのサブシステムから構成されています。まず、1 つめのサブシステムは、〈高度副プログラム等受講ガイダンスシステム〉です。学生の学びたい「知」や将来の進路等希望に合った教育プログラム・授業科目をガイドし、学際融合教育プログラムの受講申請ができるシステムで、これはプログラムの申請時に活躍します。2 つめのサブシステムは、〈教育プログラム開発支援システム〉です。大阪大学及び他大学の研究科の授業科目の中から、適切

な科目による新たな学際融合教育プログラムの開発ができるシステムです。このサブシステムはまだ利用者が少ないので、これを機会に是非ともご利用頂きたいと思います。

6. 学際融合教育プログラムの円滑な実施のための支援

プログラム実施組織と意見交換会を定期的に開催するなど学際融合教育プログラムの円滑な実施のための支援も行っています。

最後に、センターが描く学際融合教育プログラムの将来像です。

まず、大阪大学の大学院に入学したら、多くの学生が学際融合教育プログラムを受講する。少しまとまった知見を得るには高度副プログラムを、自身の研究領域と同程度まで別の領域を学ぶには副専攻プログラムを受講する。将来的には、副専攻プログラムをより主専攻に準じたものにするよう、副専攻プログラムに副指導教員を配置するなどの方法も取り入れバージョンアップする。このような将来像を描いています。

終わりに

学際融合教育研究センターは、このように大阪大学の学際融合的な「副」の教育に力を注いでいます。この「副」教育は、当然ながら学生が本来学ぶべき「主」の教育の充実があってこそ生きてくるものであり、「主」教育があってこそ、「複眼的視野」が得られると考えます。

学際融合教育プログラムは始まったばかりです。各研究科・センターなどの教職員のご理解とご協力により、多くの学生の方々がこの学際融合教育プログラムを受講して、もう 1 歩先に進んで頂きたいと思います。また、この記事を読んで、学際融合教育に興味を持って頂けたら、是非とも、本センター HP²⁾ をご覧ください。

1) 第二期中期計画の項目である「学際融合教育の充実」にも挙げられており、「阪大スタイル」(全国の諸大学のモデルとなりうるような特色ある活動と運営スタイル)の中でも、「個性あふれる教育」として取り挙げられています。

2) 学際融合教育研究センター HP

URL <http://www.osaka-u.ac.jp/jp/facilities/gakusai/index.html>

役員室だより

2011.2 Vol.40

大学の動き

平成23年度概算要求に係る予算案の伝達

平成23年度概算要求事項については、昨年の6月17日に文部科学省に提出、8月末に文部科学省から財務省への概算要求の結果、12月下旬に予算案の伝達がありました。

平成22年度予算における「臨時的減額」(▲1.8%)については、今回、「大学改革促進係数」として▲1.6%の減額となっています。

また、平成22年度補正予算に係る交付決定がありましたので併せて報告します。

平成23年度概算要求事項予算案伝達内訳

部 局 名	事 項 名	備 考
【学部・大学院組織等整備】		
歯 学 部	学部入学定員の減(12名減)	
人 間 科 学 部	学部入学定員の増(7名増)	
医 学 系 研 究 科(保健学)	博士前期課程入学定員の増(19名増)	
情 報 科 学 研 究 科	博士前期・後期課程専攻の入学定員の変更(前期2名増、後期増減なし)	
医 学 系 研 究 科(医科学)	博士課程専攻の改組(5専攻を1専攻へ、定員増減なし)	
医 学 部(医学科)	編入学時期の変更(H22)に係る3年次編入学生入学定員の減	
【特別経費】		
○プロジェクト分 (事項名称における太斜字は継続分を示す。)		
国際的に卓越した教育研究拠点機能の充実		
グローバルコラボレーションセンター	国際協力・共生社会のための実践的教育改革事業-グローバルコラボレーションセンター-(9-5)	
サイバーメディアセンター	大学教育のグローバル化に対応したFD支援事業(4-3)	
基礎工学研究科	量子情報融合による未来型材料創出事業-スピントロニクス、オプトロニクス、モレキュラロニクス、クオントロニクスの融合による未来型機能材料創出事業-(5-3)	
歯学研究科・歯学部附属病院	「口の難病」から挑むライフ・イノベーション(6-1)	新規
高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実		
コミュニケーションデザイン・センター	コミュニケーションデザイン教育事業の推進-コミュニケーションデザイン・センター-(11-7)	
連合小児発達学研究所	「子どものこころの発達研究センター」による教育研究事業(10-6)	一般経費へ組替
世界言語研究センター	社会人を対象とした学士レベルの外国語教育プログラムの提供(3-3)	
学際融合教育研究センター	学際融合教育事業の推進-学際融合教育研究センターの構築-(5-3)	
ナノサイエンスデザイン教育研究センター	ナノサイエンス総合デザイン力育成事業の推進-多重ネットワーク型産学・国際連携人材育成-(4-3)	
医学部附属病院	医療安全能力向上のための効果的教育・トレーニングプログラムの開発-医療安全学の構築と人材育成-(5-3)	
知的財産センター	総合的知的財産教育事業の推進-知財センター(IPrism)の設置-(6-2)	
薬学研究所	先導的薬剤師養成に向けた実践的アドバンスト教育プログラムの共同開発(6-2)	
情報科学研究科金融・保険教育研究センター	ソフトウェアイノベーション先導のための研究教育プログラムの開発(4-1)	新規
幅広い職業人の養成や教養教育機能の充実		
サイバーメディアセンター	高度外国語教育全国配信システムの構築(5-5)	
大学の特性を生かした多様な学術研究機能の充実		
世界言語研究センター	民族紛争の背景に関する地政学的研究-中央アジア、アフリカ、パレスチナ、旧ユーゴの言語・文化の研究-(5-5)	
科学教育機器リノベーションセンター	革新的研究教育基盤機器開発整備事業(5-4)	
産業科学研究所	附属研究所間アライアンスによるナノとマクロをつなぐ物質・デバイス・システム創製戦略プロジェクト(6-2)	
接合科学研究所	特異構造金属・無機融合高機能材料開発共同研究プロジェクト(6-2)	
蛋白質研究所	生命分子素子から生命システムの全体像を解き明かす多次元国際研究(6-2)	
レーザーエネルギー学研究センター	レーザー-相対論核科学の開拓(6-2)	
核物理研究センター	サブアトム科学推進事業(4-2)	
超高圧電子顕微鏡センター	超高圧電子顕微鏡連携ステーション(第 期)(6-2)	
医学系研究科(保健学専攻)・社会経済研究所・薬学研究科・人間科学研究科・歯学研究科・基礎工学研究科	高齢双生児レジスリーに基づく双生児研究基盤の構築-心豊かで健やかな超長寿社会を目指して-(4-1)	新規

部 局 名	事 項 名	備 考
産学連携機能の充実		
臨床医工学融合研究教育センター	医・工・情報連携によるハイブリッド医工学産学連携拠点整備事業 - 医工情報連携センター構築にむけて - (4-1)	新規
○全国共同利用・共同実施分		
産業科学研究所	物質・デバイス領域共同研究拠点によるネットワーク型共同研究事業(6-2)	
社会経済研究所	行動経済学公募共同研究プロジェクト(6-2)	
微生物病研究所	微生物病共同研究拠点事業(6-2)	
接合科学研究所	接合科学共同利用・共同研究拠点事業(6-2)	
蛋白質研究所	蛋白質研究共同利用・共同研究拠点事業(6-2)	
核物理研究センター	サブアトム科学研究拠点事業(6-2)	
レーザーエネルギー学研究センター	超高強度レーザーが拓く高エネルギー密度科学の戦略的研究拠点事業(6-2)	
○基盤的設備等整備		
文部科学省積算事項	設備サポートセンター整備経費	新規

【病院特別医療機械設備（長期借入金対象）】		
医学部附属病院	動的筋力評価訓練システム	
医学部附属病院	心機能解析システム	

平成22年度補正

【国立大学法人設備整備費補助金】		
歯学研究所	「口の難病」データベース機器	
情報科学研究科	実践的ソフトウェア開発サーバシステム	
接合科学研究所	自動X線マイクロアナライザシステム	特別経費(基盤的設備等整備)要求事項
歯学部附属病院	オーラルヘルスユニット(デンタルチェアユニット) 39台	特別経費(基盤的設備等整備)要求事項

平成23年度予算案における国立大学法人等整備の実施予定事業

- 継続事業(2件)
 - (豊中) 学生交流棟施設整備事業(PFI事業13-7)
 - (吹田) 研究棟改修(工学部)施設整備事業(PFI事業13-6)
- 新規事業(4件)
 - (吹田) 総合研究棟改修(人間科学系)
 - (吹田) 総合研究棟改修(微生物系)
 - (吹田) バイオテクノロジー国際交流拠点施設
 - (医病) 基幹・環境整備(防災設備等改修)

経営協議会を開催

今年度第3回経営協議会を12月6日(月)に、中之島センターで開催しました。学外委員9名、学内委員13名が出席し、2時間にわたり審議、意見交換が行われました。各委員から、学生の外国語教育の充実、職業意識や進路選択の自覚の向上、不正経理防止の強化など大学運営や教育に対する意見が出されました。

大阪大学活動方針2011

昨年12月に、大阪大学活動方針2010の実施状況を取りまとめ、その結果をもとに事項の見直しを行うとともに、各部局の教育・研究体制の見直しや若手研究者の支援など新たな事項を追加した「大阪大学活動方針2011」を作成しました。大学執行部がこの1年間どういうところに取り組んでゆくか、また、何を実現してゆくかを示したものです。構成員のみなさんには是非読んでいただき、大阪大学の諸活動についてご協力とご支援をよろしくお願いいたします。

各室の検討状況

総合計画室

学内措置による教育研究組織の整備

新たな予算措置を伴わない学内措置による教育研究組織の整備として、12月及び1月の役員会で次の事項が承認されました。

- 工学研究科附属超精密科学研究センターの改組及び設置期間の延長（平成23年4月1日）
 - ・ 3研究部門を4研究ユニットに改組
 - ・ 設置期間を10年延長（平成33年3月31日まで）
- 太陽エネルギー学研究センターの改組及び時限の廃止（平成23年4月1日）
 - ・ 2研究分野と1連携分野を4研究分野に改組
- 歯学研究科分子病態口腔科学専攻の次世代口腔医療創薬開発科学連携分野の設置（平成23年4月1日）
 - ・ 連携機関：独立行政法人医薬基盤研究所

平成23年度大学留保ポストの配分

平成23年度大学留保ポストについて、総長・理事によるヒアリング（1月24日～28日）と、総合計画室によるヒアリング（2月2日）をそれぞれ実施し、2月の役員会で次のとおり配分することを決定しました。

平成23年度大学留保ポストの配分

留保ポスト配置部局等	配分ポスト	配分期間
医学系研究科 予防環境医学専攻健康スポーツ科学講座	助教1	23. 4. 1～26. 3. 31（3年）
薬学研究科 分子薬科学専攻生命分子化学講座	助教1	23. 4. 1～26. 3. 31（3年）
薬学研究科 生命情報環境科学専攻微生物生態学講座	助教1	23. 4. 1～26. 3. 31（3年）
工学研究科 フォトニクス先端融合研究拠点	教授1	23. 4. 1～27. 3. 31（4年）
歯学部附属病院 医療情報室	助教1	23. 12. 1～26. 11. 30（3年）
先端科学イノベーションセンター 総合リエゾンコーディネーション部門	助教1	23. 4. 1～26. 3. 31（3年）
科学教育機器リノベーションセンター 先端機器開発室	助教1	23. 4. 1～26. 3. 31（3年）
科学教育機器リノベーションセンター リユース促進室	技術職員1	23. 4. 1～26. 3. 31（3年）
レーザーエネルギー学研究センター 大型装置運用計画室/パワーフォトニクス研究部門	講師1	23. 10. 1～28. 9. 30（5年）
学際融合教育研究センター	教授1	23. 6. 16～26. 3. 31（2年9ヶ月半）
適塾記念センター 大阪学研究部門（新設）	准教授1	23. 4. 1～28. 3. 31（5年）
埋蔵文化財調査室	助教1	23. 4. 1～28. 3. 31（5年）
キャンパスデザイン室	助教1	23. 4. 1～26. 3. 31（3年）
低炭素化推進組織（新設予定）	講師1	23. 4. 1～28. 3. 31（5年）
データ管理分析室	助教1	23. 4. 1～26. 3. 31（3年）
学生支援ステーション 障害学生支援ユニット	助教1	23. 4. 1～26. 3. 31（3年）
学生支援ステーション 進路相談ユニット	准教授1	23. 4. 1～26. 3. 31（3年）
大型教育研究プロジェクト支援室	講師1	23. 4. 1～28. 3. 31（5年）
情報基盤本部	教授1	23. 4. 1～28. 3. 31（5年）

産研管理棟の耐震改修工事が完了

産研管理棟の耐震改修工事が完了しました。耐震補強を外壁面でなく建物内部で行うことにより、既存のモダニズム建築の外観イメージを保ちつつも、赤のアクセントカラーを採用した軽やかなアルミ素材の玄関庇（キャノピー）を新しい建築要素として

加えることで、表情豊かなファサードとなるよう配慮しました。また、多目的トイレや福祉対応エレベーターを新設するなど、バリアフリー化を推進し、あらゆる人々がより利用しやすい施設へとリニューアルしました。



南面外観



玄関庇（キャノピー）



多目的トイレ

構造：鉄筋コンクリート造

規模：地上2階

延床面積：1,996 m²

着工年月：平成22年1月

完成年月：平成22年9月

楠本会館の耐震改修工事が完了

楠本会館の耐震改修工事が完了しました。緑豊かな周辺環境との調和に配慮し屋根を緑青色とする一方で、玄関横の壁面に天然木材の仕上材を採用し、また2階腰壁部に補色的な赤橙色を採用することで、

適度な華やかさのあるファサードとなるよう演出しました。建物内部は耐震改修と合わせ会議室を宿泊室に変更したり、リエゾンオフィスを設置するなど、本学のニーズに対応した改修を行いました。



西面外観



南東面外観



リエゾンオフィス

構造：鉄筋コンクリート造

規模：地上2階

延床面積：433 m²

着工年月：平成22年1月

完成年月：平成22年7月

教育・情報室

平成23年度大学教育改革の支援の充実関連予算

平成22年末に、平成23年度政府予算案が閣議決定されました。大学教育改革の支援の充実に関連する予算は以下のとおりです。

【主なプログラムの予定額】

・博士課程教育リーディングプログラム【新規】	(39億円)
・グローバルCOEプログラム	(237億円)
・大学教育質向上推進事業（大学教育・学生支援推進事業）	(46億円)
・地域・社会の求める人材を養成する大学等連携事業 （大学教育充実のための戦略的大学連携支援プログラム）	(21億円)
・大学生の就業力育成支援事業	(29億円)
・組織的な大学院教育改革推進プログラム	(7億円)
・口蹄疫等家畜伝染病に対応した獣医師育成環境整備事業【新規】	(0.3億円)
・大学の世界展開力強化事業【新規】 （日中韓等の大学間交流を通じた高度専門職業人育成事業含む）	(22億円)
・大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業 （旧国際化拠点整備事業を組み立て直し）	(29億円)
・大学・大学院における専門医療人材養成機能強化事業	(20億円)
・大学病院人材養成機能強化事業	(23億円)
・大学病院における医師等の勤務環境の改善のための人員の雇用	(21億円)

ここには「グローバルCOEプログラム」など、継続事業のための所要額のみ計上されている場合もありますが、本学にとって重要な意味を持つ新規事業として「博士課程教育リーディングプログラム」、いわゆる「リーディング大学院」などが含まれています。

中央教育審議会答申「グローバル化社会の大学院教育 ～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～」

平成23年1月31日に、標記の答申が発表されました。以下のページからダウンロードすることができます。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1301929.htm

5年前の平成17年9月の中教審答申「新時代の大学院教育」では、「大学院教育の実質化（教育の課程の組織的展開の強化）と国際的な通用性、信頼性（大学院教育の質）の向上を通じ、国際的に魅力ある大学院教育を構築していくこと」が求められました。これに基づき文部科学省は、平成18年3月に5カ年計画「大学院教育振興施策要綱」を定め、これにより大学院設置基準の改正、グローバルCOEプログラムや大学院GP（組織的な大学院教育改革推進プログラム）による支援などが進められてきました。中教審では平成20年9月に、「中長期的な大学教育の在り方について」文部科学大臣の諮問を受け、平成23年度以降の新たな「施策要綱」の策定を視野に、平成17年の答申後の大学院教育の実質化等の進捗状

況や課題の検証が開始され、人社会・理工農系・医療系・専門職学位課程の4つのワーキング・グループが設置されました。

この検証結果を踏まえてまとめられたのが、本答申「グローバル化社会の大学院教育～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～」です。「グローバル化や知識基盤社会が進展する中、世界の多様な分野で、大学院修了者が活躍することが我が国の成長と発展にとって不可欠との認識の下、大学院教育の飛躍的な充実」が求められています。とくに「リーディング大学院」を形成し、「産学官が一体となって世界を牽引するリーダーの養成を強力に推し進める」とされています。

グローバル化社会の大学院教育
～世界の多様な分野で大学院修了者が活躍するために～
答申

平成23年1月31日
中央教育審議会

アドミッション・ポリシーの検討

大阪大学では全学の入試委員会を通じて、アドミッション・ポリシー（学生の受け入れについての方針）の検討を開始しました。これは、本学の第2期中期計画と年度計画に基づくものです。今後、各学部・研究科のアドミッション・ポリシーを、ディプロマ・

ポリシー（学位授与についての方針）とカリキュラム・ポリシー（教育課程についての方針）と併せて体系的に検討し、それぞれの学部・研究科のアドミッション・ポリシーに基づく入試と学生の選抜方法について考えていく予定です。

高度教養プログラムの開始

平成23年4月から、「高度教養プログラム：知のジumnasティックス」が開始されます。

これは本学の学部高年次、及び大学院生が選択して履修することができるプログラムです。高度教養プログラムは、「一定の専門知識を身につけ、（職業人あるいは研究者として）社会にまもなく出て行く学生に対して、専門教育以外に必要なとされる知識や能力を与える教育」として位置付けられています。このプログラムにより、学生が自らの専門とは異なる知の領域に触れるとともに、専門の異なる学生の協働による学びを経験することが重視されています。

高度教養プログラムの科目は、知識習得を中心としたものと多様なスキルの習得を含むものとがあり、総合大学である大阪大学全学の多様な科目から、初

年度は大学院生のために177科目、学部高年次のために35科目が提供されます。それぞれの科目には、その特色や狙いに応じて、次の4種類のキーワードが付してあります。

- 「世界を舞台に活動する」
- 「異分野の融合を社会に演出する」
- 「成熟した市民社会を創る」
- 「タフな知性で社会を輝かせる」

これらのキーワードを参考に、学生が一人ひとりの希望や計画にしたがって自由に科目を選択し、独自のプログラムを設計することになっています。修得した単位が修了要件あるいは卒業要件の単位に含まれるかどうかは、学生が所属する研究科・学部の規程に従います。

教育関係の概算要求

平成23年度の教育関係の概算要求による特別経費（プロジェクト分）として、「国際的に卓越した教育研究拠点機能の充実」で継続2件、「高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実」で新規1件と継続

8件（内1件は一般経費へ組替）また、「幅広い職業人の養成や教養教育の充実」で継続1件の予算が認められました。詳しくは8ページをご覧ください。

教育組織の整備

大阪大学では総長を本部長とする教育基盤整備本部を設置し、専攻、学科などの整備を積極的に進め

ています。平成23年度の概算要求では、8ページに記載した組織整備が認められました。

平成23年度提供の「大学院等高度副プログラム」「科目等履修生高度プログラム」の拡大、および「副専攻プログラム」の開始

学際的な大学院教育プログラムとしての「大学院等高度副プログラム」と「科目等履修生高度プログラム」は、本学の教育の大きな特色となっています。

本年度は大学院等高度副プログラム27件を実施していますが、平成23年度は35件に拡大します。これに加えて、より広く深い専門的な素養を培うための「副専攻プログラム」が開始します。高度副プロ

グラムの修了要件は（主専攻の修了要件に加えて）8単位であるのに対し、副専攻プログラムの修了要件は14単位です。平成23年度には3件の副専攻プログラムが新規に開設されます。以下の一覧表をご参照ください。新しいプログラムには色を付けて示しています。

平成23年度 大学院等高度副プログラム一覧表

整理番号	新規・継続	プログラム名称	提案部局	連携部局	修了単位数	履修対象者	備考
1	継続	ERASMUS MUNDUS英語授業・現代日本論	文学研究科	-	8単位以上	M・D	
2	継続	アート・メディアロジック入門講座 - 理論と実践	文学研究科	CSCD	8単位以上	M	
3	継続	医科学修士の健康医療問題解決能力の涵養	医学系研究科 (医科学専攻)	-	8単位以上	M	
4	継続	高度がん医療人材育成プログラム	医学系研究科 (保健学専攻)	薬学、核物、CSCD	8単位以上	M・D	
5	継続	まちづくりデザイン学	工学研究科	CSCD	8単位以上	M	
6	継続	高度溶接技術者プログラム	工学研究科	-	10単位以上	M・D	
7	継続	学際光科学	工学研究科	理学、基礎工	8単位以上	M・D	
8	継続	光通信及びフォトニックネットワーク工学	工学研究科	-	8単位以上	M	
9	継続	認知脳システム学	基礎工学研究科	人間、医学系、工学	10単位以上	M・D	
10	継続	言語情報処理の手法と展開	言語文化研究科	-	8単位以上	M・D	
11	継続	グローバルリーダーシップ・プログラム	国際公共政策研究科	-	8単位以上	M・D	
12	継続	IT Spiral	情報科学研究科	-	14単位以上	M1	
13	継続	高度情報ネットワーク実践スペシャリスト	情報科学研究科	-	8単位以上	M	
14	継続	感染症学免疫学融合プログラム	微生物病研究所	医学系、免疫学	10単位以上	D	
15	継続	インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践	国際教育交流センター (H22年度実施分: 留学生センター)	言文	8単位以上	M・D	
16	継続	臨床医工学・情報学融合領域の人材育成教育プログラム: 専門科	[バイオメディカルインフォマティクスコース] [バイオマテリアル学コース] [高度診断治療工学コース] [臨床工学技術者育成コース] [分子イメージング創薬プロジェクト育成コース] [予測社会医学プロジェクト育成コース]	臨床医工学融合研究教育センター	医学系、歯学、薬学、工学、基礎工、情報、実践、CSCD	9単位以上	M・D
17	継続	臨床医工学・情報学融合領域の人材育成教育プログラム: 高度職業人育成科		臨床医工学融合研究教育センター	経済、医学系、薬学、CSCD	10単位以上 11単位以上 11単位以上	M・D
18	継続	コミュニケーションデザイン	コミュニケーションデザイン・センター	文学、人間	8単位以上	B5、6・M・D	
19	継続	金融・保険	金融・保険教育研究センター	経済、理学、基礎工、情報	8科目以上	M・D	
20	継続	グローバル共生	グローバルコラボレーションセンター	人間、法学、言文、国際公共、CSCD	10単位以上	M・D	
21	継続	人間の安全保障と開発	グローバルコラボレーションセンター	人間、経済、医学系、薬学、工学、国際公共、実践、CSCD	8単位以上	M・D	
22	継続	司法通訳翻訳 (旧: 司法通訳翻訳論)	グローバルコラボレーションセンター	人間、法学、言文	10単位以上	M・D	プログラム名称変更
23	継続	現代中国研究	グローバルコラボレーションセンター	文学、人間、法学、経済、言文、国際公共	8単位以上	M・D	
24	継続	サステナビリティ学	環境イノベーションデザインセンター (H22年度実施分: サステナビリティ・デザイン・センター)	人間、法学、経済、医学系、工学、基礎工、国際公共、CSCD	8単位以上	M・D	
25	継続	ナノサイエンス・ナノテクノロジー高度学際教育研究訓練プログラム (博士前期課程高度学際教育)	ナノサイエンスデザイン教育研究センター	理学、医学系、薬学、工学、基礎工、生命、産研、接合研、超高压、極限、太陽、レーザー研	9単位以上	M	
26	継続	ナノサイエンス・ナノテクノロジー高度学際教育研究訓練プログラム (博士後期課程社会人特別選抜)	ナノサイエンスデザイン教育研究センター	理学、医学系、薬学、工学、基礎工、生命、産研、接合研、超高压、極限、太陽、レーザー研	9単位以上	D	
27	新設	イノベーションリーダー人材育成基礎プログラム	経済学研究科	医学系、工学	10単位以上	M・D	
28	新設	キャリアデザイン ~ 高度な学びを活かすキャリアパスをデザインする ~	工学研究科	基礎工	8単位以上	M・D	
29	新設	国際標準化	工学研究科	国際公共	8単位以上	M・D	
30	新設	量子エンジニアリングデザイン研究特別プログラム	工学研究科	理学、基礎工、情報、産研、科学教育	8単位以上	M・D	
31	新設	国連政策エキスパートの養成	グローバルコラボレーションセンター	人間、医学系、薬学、国際公共、CSCD	8単位以上	M・D	
32	新設	グローバル健康環境	グローバルコラボレーションセンター	人間、医学系、薬学、工学、国際公共	8単位以上	M・D	
33	新設	医療通訳	グローバルコラボレーションセンター	人間、医学系、薬学、言文、CSCD	8単位以上	M・D	
34	新設	ナノサイエンス・ナノテクノロジー高度学際教育研究訓練プログラム (博士後期課程教育研究訓練プログラム)	ナノサイエンスデザイン教育研究センター	理学、医学系、薬学、工学、基礎工、生命、産研、接合研、超高压、極限、太陽、レーザー研	8単位以上	D	
35	新設	知的財産法を修得した人材育成	知的財産センター	法学研究科	10単位以上	M・D	

履修対象者 B5、6・・・6年制課程の学部(医学部・歯学部・薬学部)の5、6年次
M・・・博士前期課程・修士課程(生命機能研究科は博士課程1・2年次)
D・・・博士後期課程・博士課程(生命機能研究科は博士課程3年次以上)

平成 23 年度 大学院科目等履修生高度プログラム一覧表

整理番号	新規・継続	プログラム名称	提案部局	連携部局	修了単位数	履修対象者	履修期間
1	継続	アート・メディアロジー入門講座 - 理論と実践	文学研究科	CSCD	8単位以上	社会人	1年
2	継続	医科学修士の健康医療問題解決能力の涵養	医学系研究科(医科学専攻)	-	8単位以上	社会人	1年
3	継続	言語情報処理の手法と展開	言語文化研究科	-	8単位以上	社会人	1年
4	継続	インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践	国際教育交流センター(H22年度実施分:留学生センター)	言文	8単位以上	社会人	1年
5	継続	金融・保険	金融・保険教育研究センター	経済、理学、基礎工、情報	8科目以上	社会人 他大学 大学院生	スタンダード・プログラム:3年 アドバンス・プログラム:4年
6	継続	ナノサイエンス・ナノテクノロジー高度学際教育研究訓練プログラム(社会人教育)	ナノサイエンスデザイン教育研究センター	理学、医学系、薬学、工学、基礎工、生命、産研、接合研、超高压、極限、太陽、レーザー研	9単位以上	社会人	2年
7	新設	ビジネスリーダー人材育成基礎プログラム	経済学研究科	-	10単位以上	社会人 他大学 大学院生	2年

平成 23 年度 大学院副専攻プログラム一覧表

整理番号	新規・継続	プログラム名称	提案部局	連携部局	修了単位数	履修対象者
1	新設	認知脳システム学	基礎工学研究科	人間、医学系、工学	14単位以上	M・D
2	新設	金融・保険	金融・保険教育研究センター	経済、理学、基礎工、情報	8科目以上	M・D
3	新設	ナノサイエンス・ナノテクノロジー高度学際教育研究訓練プログラム(博士前期課程高度学際教育副専攻プログラム)	ナノサイエンスデザイン教育研究センター	理学、医学系、薬学、工学、基礎工、生命、産研、接合研、超高压、極限、太陽、レーザー研	14単位以上	M

履修対象者 M・・・博士前期課程・修士課程(生命機能研究科は博士課程1・2年次)
D・・・博士後期課程・博士課程(生命機能研究科は博士課程3年次以上)

キャリア形成教育検討ワーキングの設置

阪大 NOW6 月号(2010/No.118)でお知らせしたとおり、キャリア形成に関する大学設置基準が改正され、平成 23 年 4 月から施行されます。

キャリア形成は、単なる法的要請や就職状況の問題を超えて、学部生や大学院生などに共通するきわめて重要な事項です。本学としてどのようにキャリア形成教育に取り組むべきかを検討するため、教育・情報室のもとに「キャリア形成教育検討ワーキング」を設置しました。

このワーキングは、学生がそれぞれ潜在的に持つ

可能性を最大限に実現できるような教育の構築を目指し、国内・国外の大学で行われているキャリア教育の研究、大阪大学のキャリア支援教育の現状確認、国内・国外の各種インターンシップ等を通じた実地教育の推進、キャリアパス開発支援の全学制度の検討などを行う予定です。主査は教育・情報室員の三原健一教授(言語文化研究科)で、ワーキングの委員は全学から参加いただいています。産業界等との協働や対話も重視していきます。

機関リポジトリ(学術情報庫 OUKA)

大阪大学附属図書館が運営する機関リポジトリ(学術情報庫 OUKA)は、本学の研究成果等を現時点で 18,000 件以上、インターネットで無料公開しています。学術情報のオープンアクセス化はたいへん重要な事業ですので、全学の協力をお願いします。詳しくは本誌の 66 ページをご覧ください。



卒業式・学位記授与式と入学式

平成 22 年度の卒業式・学位記授与式、及び平成 23 年度の入学式は、以下の通り行われます。

平成 22 年度卒業式・学位記授与式
日時: 平成 23 年 3 月 25 日(金) 11:00 - 12:30
場所: 大阪城ホール(大阪市中央区大阪城 3 番 1 号)
講話: 豊島久真男先生(本学卒業生・名誉教授)

平成 23 年度入学式
日時: 平成 23 年 4 月 6 日(水) 13:30 - 14:20
場所: 大阪城ホール(大阪市中央区大阪城 3 番 1 号)

研究・産学連携室

研究推進に関する将来構想等ヒアリングについて

研究・産学連携室においては、国立大学法人における昨今の厳しい予算事情を踏まえ、大阪大学の将来構想等の研究推進に関する検討を戦略的に実施していくための取り組みを開始しました。

まずは、最初の取り組みとして、グローバルCOEプログラム拠点リーダー、研究企画WG研究代表者から次期リーダーとして期待される研究者をご推薦いただき、その中の6名に対して、平成22年12月28日(火)にヒアリングを実施しました。

ヒアリングで頂戴した6名の先生からの貴重なご意見については、研究・産学連携室において、今後の研究推進等に関して、本学の将来構想等にどのように反映させていくかを検討し、今後も同様の取り組みを企画しながら、さらに多くの先生方からご意見を頂戴しつつ、本学の研究推進に関する取り組みを推進してまいります。

今後の研究・産学連携室における活動について、引き続きご協力をよろしくお願いいたします。

科学技術振興機構（JST）との意見交換会を開催

研究・産学連携室の活動の一環として、1月13日(木)に、銀杏会館大会議室において、独立行政法人科学技術振興機構（JST）との意見交換会を、大型教育研究プロジェクト支援室・支援事務室が企画・開催しました。

本意見交換会は、JST 小原理事、眞峯理事他9名、本学からは研究・産学連携室員はじめ本学の代表的研究者等40名が参加する中、本学西尾理事・副学長、JST 小原理事の挨拶に始まり、JST からは研究プロジェクトや産学連携事業等の紹介がなされ、本学からは研究推進や各研究企画ワーキング・グループの紹介および共同研究講座と現在建設中のテクノアライアンス棟の紹介を行いました。また、その後の総合討論では忌憚のない意見交換が活発に行われ、和やかな雰囲気のもと閉会しました。

本意見交換会を通じて、JST 事業に対する理解を深めるとともに、大阪大学の研究ポテンシャルの高さが評価されたこと、さらに、今後もJSTとの協力関係を深めていくことが確認され、大変有意義なものとなりました。



阪大からのプレゼンテーション



西尾理事・副学長の挨拶



総合討論風景

若手研究者のキャリア問題。大阪大学は？

大阪大学は総長の指揮の下、産学連携推進本部を中心に、全学の博士人材を対象にイノベーションリーダー養成プログラム「CLIC」を実施するなど、若手研究者のキャリア形成のための取り組みを推進しています（CLIC プログラムについては、24 ページをご覧ください）。また、同プログラムでは、事業の円滑な推進のため「若手研究人材動態データベース」を整備し、学内の研究人材の動態を追跡調査しています。

近年、若手研究者のキャリアの形成が全国の大学・研究機関の課題として注目されています。では、大阪大学の現状はどうでしょうか。

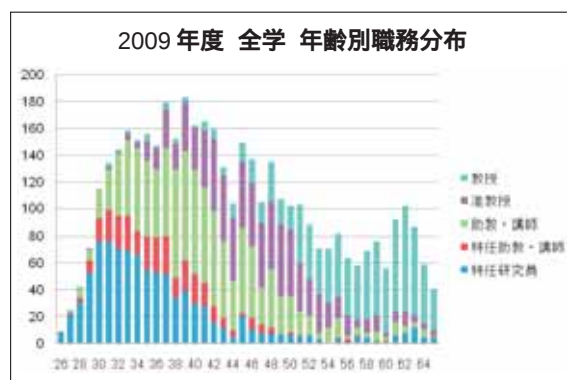
グラフ 1・2・3 は、大阪大学の教育研究系職員の年齢別分布を示しています。グラフ 1 は全学の分布、グラフ 2 は工学系、グラフ 3 は生物系の職員に限定したものです。いずれにしても、特任研究員・特任助教といった教育研究系職員が、若手を中心に数多く雇用されていることがわかります。対して、教授・准教授等のいわゆる定員ポスト数は、若手全てを吸

収するほど多くはありません。

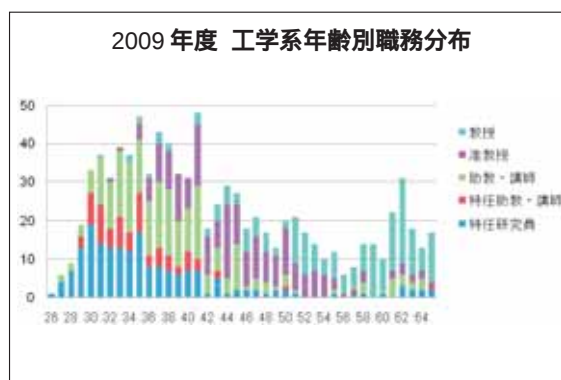
また、グラフ 4 は、博士後期課程の学生定員に対する志願者数と入学者数の推移を示していますが、志願者数が定員に達しない年もあります。博士後期課程修了後の若手研究者の不安定な雇用状況は、志願者数の低迷の一因となっていると考えられます。若手研究者のキャリア形成に対する取り組みは、大学院の活性化に関連する重要な課題となります。

若手研究者のキャリア形成という課題に対しては、全学的な取り組みが必要不可欠です。若手研究人材養成への教職員の皆様の積極的参加、とりわけ、CLIC プログラムへのご協力をよろしくお願いいたします。

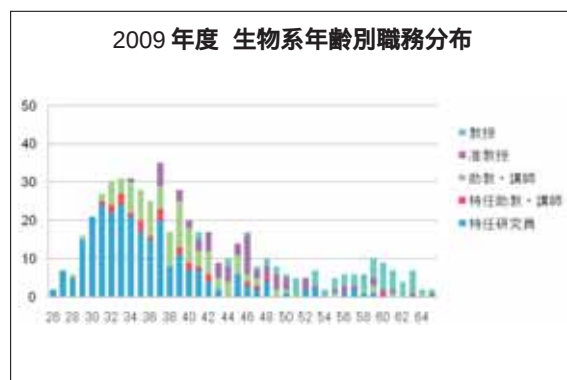
脚注： 工学系は、工学研究科・産業科学研究所・接合科学研究所。生物系は、生命機能研究科・理学研究科生物科学専攻・微生物病研究所・蛋白質研究所・生物工学国際交流センター・遺伝情報実験センター・免疫学フロンティア研究センター。



グラフ 1 (2009年度 教育研究系職員 年齢別職務分布 全学)



グラフ 2 (同 工学系)



グラフ 3 (同 生物系)



グラフ 4 (博士後期課程志願者数 2004年度～2010年度)

評価室

平成22年度業務実績報告書の作成について

第2期中期目標期間の初年度である平成22年度の年度計画に係る業務実績報告書を作成する時期となりました。

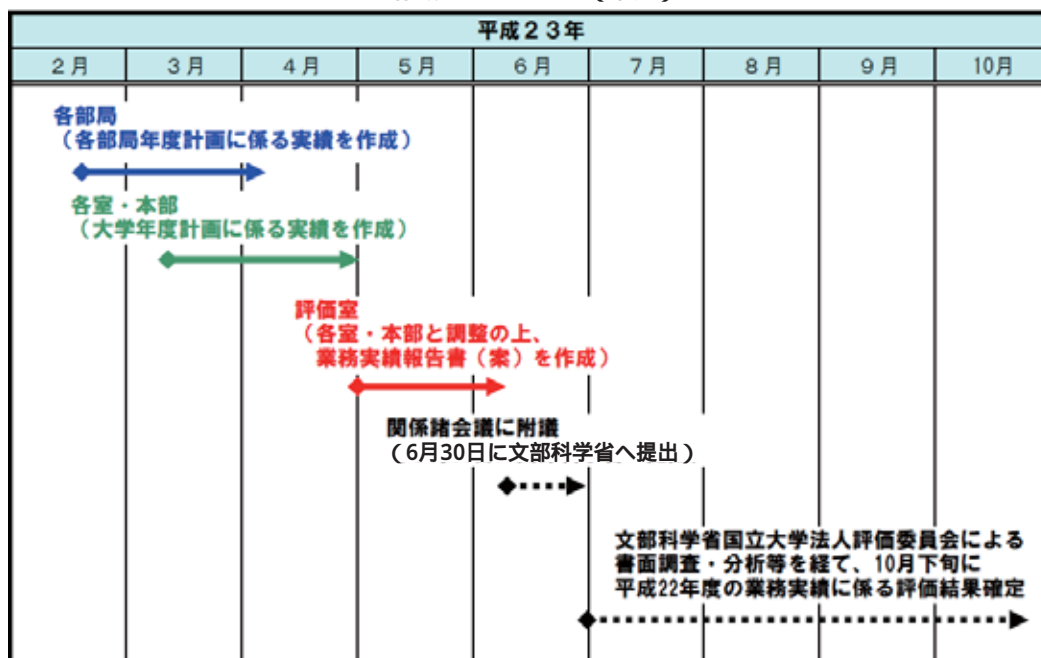
第2期中期目標期間における国立大学法人評価については、国立大学法人評価委員会より、その方向性が示され、評価方法の簡素化等、改善が図られましたが、一方で、着実な自己点検・評価の実施や、国立大学法人の社会的説明責任の観点から、教育研

究活動等の情報の公表促進に向けた一層の取り組みが求められております。

各室及び各部局等におかれましては、業務実績報告書の作成に向けて、引き続きご協力よろしくお願いいたします。

なお、同報告書作成に係るスケジュールは、次のとおりです。

【作成スケジュール（予定）】



各部局における教育研究活動のグラフデータ作成について

このたび、全学基礎データを基にして、評価室（データ管理分析室）において、平成16～21年度における各部局の教育研究活動の実績等について、経年的にまとめたグラフデータを作成し、各部局に送付しました。

本資料は、各部局における教育研究活動の改善・充実並びに自己点検・評価及び外部評価の促進に向

けて、ご活用いただくことを目的としておりますが、平成23年1月24日(月)～28日(金)に実施された「総長・理事による概算要求ヒアリング」における参考資料としても、「部局達成状況評価書」に加えて活用することにより、より効果的なヒアリングを実施することができました。

財務室

平成22年度教育研究等重点推進経費の執行計画について

「教育研究等重点推進経費」の第5次執行計画（案）が承認されました。採択事業は以下のとおりです。

第5次執行計画

部 局 等 名	事 項 名	経費区分
附属図書館	外国学図書館利用案内・監視カメラシステムの設置	間接経費
附属図書館	研究と教育のインターフェースの形成	
文学研究科	教育・研究環境改善・環境対策経費・老朽化設備環境改善・	
人間科学研究科	中型動物（小型霊長類）飼育室個別空調システム	
法学研究科	文法経講義棟空調設備の更新	
医学系研究科（保健学科）	高度看護技術習得のための学習設備	
医学系研究科（保健学科）	検査技術科学実習機器の更新	
薬学研究科	薬学教育・研究に必要な核磁気共鳴装置の充実化	
工学研究科	核磁気共鳴装置 JNM-ECS400 型 超電導磁石の更新	
基礎工学研究科	web 講義配信システム	
国際公共政策研究科	国際公共政策研究科棟照明設備改修工事	
生命機能研究科	研究科共通機器（塩基配列決定装置（1式）・定量RNA解析装置）のアップグレード	
産業科学研究所	FE-SEM バージョンアップ	
接合科学研究所	精密ワイヤー放電加工機の機種更新	
サイバーメディアセンター	言語学習システムの機能改善	
核物理研究センター	サイクロトン加速ビームによる放射線計測教育環境の整備	
核物理研究センター	液体シンチレーション放射線モニターシステムの更新	
ラジオアイソトープ総合センター・安全衛生管理部	放射線施設セキュリティシステム	
生物工学国際交流センター	卓上共焦点顕微鏡 TCS SPE II の購入	
極限量子科学研究センター	量子ビーム微細構造部門クリーンルームの除塵・温度湿度管理設備の老朽化による更新	
太陽エネルギー化学研究センター	ドラフトチャンパー設備の更新経費	
国際教育交流センター	箕面地区における留学生支援と交流及び留学相談に関する個別対応に必要な環境の整備	
科学教育機器リノベーションセンター	ガラス用研磨盤の更新	
科学教育機器リノベーションセンター	CNC フライス盤の更新	
ナノサイエンスデザイン教育研究センター	移動式 TV 会議設備	
総務部	本部共通棟会議室会議システム更新	
総務部	コンベンションセンター MO ホール機器更新及び点検	
学生部	体育館（吹田・豊中・箕面）バスケットコート改修	運営費交付金
学生部	学生部福利施設照明の省エネ機器への更新	
執行計画額	計 201,523 千円	

管理的経費の財務面からの検証について

「管理的経費における財務面からの検証方針」に基づき、財務諸表上の一般管理費に計上されている執行データを分析し検証を行いました。様々な問題点が判明し、現行の財務会計システムでは、一般管理費を分析するための必要な情報は得られませんでした。

今後、新たな作業負担が極力生じないことを念頭に置きつつ、さらに分析の制度を高める手法を検討し、問題点の解決を図っていきたいと考えています。

なお、検証内容については、2月の部局長会議で報告する予定です。

大学基盤推進経費により継続して実施する事業の検証結果について

大学基盤推進経費で平成23年度も前年度から継続して実施する事業を対象とし、財務室で策定した基準に基づき11件の事業を選定して検証した結果、次の課題が見受けられ、総長に報告しました。

- ・制度上の規制により、基準に定められた実務家教員を置かなければならない高等司法研究科については、必要な組織を確立するために、大学運営人件費による経費の措置を考慮する必要があると思われる。
- ・大学の戦略運営上、経常的に必要となる人件費が措置されているウェブデザイン、リスク管理及びハラスメント対策に係る事業については、大学基盤推進経費ではなく、安定的な組織を確立するための経費への移行を前提に検討する必要があると思われる。
- ・特別経費等で事業期間が限定されているプロジェ

クト事業については、事業期間終了後に他経費で事業を継続する場合、当該プロジェクト事業の成果を踏まえ、十分精査をしたうえで、経費の措置を行う必要があると思われる。

- ・10年以上継続して実施されている事業については、達成目標を明確にし、引き続き、大学基盤推進経費で措置すべきかどうか、事業実施の効果を詳細に検証する必要があると思われる。
- ・研修事業については、他の経費でも措置されていることから、研修事業全般の見直しを行うとともに、その成果を検証する必要があると思われる。

財務室では、本学で行われる教育研究等活動の向上のため、戦略的経費等が効果・効率的な予算配分となっているかなどについて引き続き検証し、次年度以降の予算の有効な活用を図っていきたいと考えています。

平成23年度教育研究等重点推進経費及び全学強化経費のヒアリング審査

財務室では、阪大NOW12月号(2010/No.121)に掲載しました、平成23年度教育研究等重点推進経費及び全学強化経費における新規事業について、各部署等から提出のあった要求事項の書類審査を行い、

ヒアリング審査の対象事項として、教育研究等重点推進経費25件、全学強化経費5件を選定し、2月14日(月)から16日(水)の3日間かけて、ヒアリング審査を行いました。



財務室員によるヒアリング風景

人事労務室

勤務時間短縮の試行実施にかかる今後の取扱いについて

勤務時間短縮（以下「時短」という。）については、昨年4月から約半数の部局の参加によりその試行を開始し、9月からは全部局にその対象を拡大してきました。

大学としては、この間、試行実施部局等から提出された実施報告等を集約し、慎重にその検証等を行ってきました。

その結果、試行の目的である「コスト増加（人件費の増加）を招かない時短の導入」に向けては概ね順調に進展していることが認められました。ただ、他方で年間を通しての試行が完了しておらず、不確定要素が多いこと等から、今後は、以下のとおり取

り扱うこととなります。

1. 「原則として勤務を命じない時間」（15分間）を置く試行実施を平成23年度も継続する。（所定労働時間は8時間のままとする。）

ただし、今年度末（2～3月）の検証を早急に実施し、その結果によっては、次年度途中からであっても本格実施する。

2. 平成23年度からは、実施報告等の簡素化を図る。
大学としては、これと並行して、勤務時間の適正な管理等に努める所存ですので、引き続きご理解とご協力をお願いします。

部局長への指定職基本給表の適用廃止及びそれに伴う管理職手当の支給について

これまで一部部局長には、指定職基本給表が適用されてまいりました。

ただ、同じ「部局長」でありながら個々の経歴等により指定職の号俸数に差異が生じておりました。

大学としては、部局長等としての職務の重責分をより明確にすることが必要であり、年齢や経歴等による差が生じないよう、（指定職基本給表を適用するのではなく）定額の管理職手当を支給することがもっとも適当であると考えました。

これらの考え方、及び新制度を現行の総人件費の枠内に収めるとの考え方に基づき、本年4月1日からは以下のとおり取り扱うこととなります。

1. 制度改正の対象者は、現在、指定職基本給表を適用されている部局長に加えて、高等司法研究科長、

小児発達学研究科長及び全国共同利用施設長とする。

2. 対象者には教育職基本給表（一）を適用する。
3. 管理職手当額については、月額25万円とし、対象者のうち学部長（外国語学部長を除く）又は総長補佐を兼務する者については、月額30万円とする。
4. 本年3月31日において、指定職基本給表を適用されている者については、その任期が満了するまでは引き続き指定職基本給表を適用するが、再任の場合は再任時点から新制度を適用する（管理職手当を支給する。）

大学としては、今後も、内外の理解を得ることのできる、よりよい制度設計に努めてまいります。

「大阪大学の開講する授業科目の受講による職員研修」のさらなる活用について

本学では、鷲田総長の発案により、平成21年1月から常勤職員が大阪大学の開講する授業科目を受講することを可能とする研修制度を設けております。

この制度は、総合大学である本学ならではのものであり、職員の皆さんのニーズに応えることができるとともに、キャリア・アップ及び資質の向上につながるものと考えています。

興味をお持ちの皆さんは、この機会にシラバスなどを参考にして、ぜひチャレンジしてみてください。

なお、必要な手続き等の詳細については、大阪大学ポータル（学内専用ページ—人事関係—人事関係規程等）に掲載しております「大阪大学の開講する授業科目の受講による職員研修の実施に関する要項」をご覧ください。

広報・社学連携室

在阪報道関係者との新年懇談会を開催

1月11日(火)、中之島センターにおいて、「在阪報道関係の皆様との新年懇談会」を開催しました。

本学からは、鷲田総長をはじめ役員等執行部、報道関係者からは10社11名の出席があり、創立80周年記念事業をはじめ、大学に係る様々な話題について相互に活発な意見交換を行いました。

詳しくは、キャンパスニュース48ページをご覧ください。



広報ネットワーク会議を開催

2月8日(火)広報・社学連携室主催による、広報ネットワーク会議をコンベンションセンターで開催しました。これは、各部局から選出された広報責任者(教員、事務職員各1名ずつ)を対象としたもので、大阪大学における広報活動の重要性や、今後の広報の役割を明らかにするために開催したものです。

当日は、各部局から90名を超える各部局から広報責任者の参加があり、高杉英一理事・副学長の挨拶の後、小川室員(理学研究科)から「大阪大学における広報ネットワークの重要性」、青江室員(高等

司法研究科)から「大学において広報活動を進めるにあたっての注意点」そして、宇野室員(薬学研究科)から「来年度から各大学に義務づけられる教育情報の公開」に関する説明と、大阪大学の取り組み状況がそれぞれ報告されました。

今後も、広報ネットワークを活用し、大阪大学のUI (University Identity) を強化するべく、広報活動を積極的に推進したいと考えておりますので、皆様のご協力をお願いいたします。



高杉理事・副学長による挨拶



会議の様子

国際交流室

国際交流関連の文科省予算について

昨年の事業仕分けの結果「一旦廃止、組み立て直し」と判定された国際化拠点整備事業（通称グローバル30）は、予算的には昨年度が約30億円であったものが29億円へとおよそ4.4%減額されましたが、「大学の国際化のためのネットワーク形成推進事業」として組み立て直し、推進されることになりました。パブリックコメントが多大な役割を果たしましたが、グローバル30採択大学の担当副学長が声明文を出すとともに記者会見も行い、一旦開始した英語コースが取りやめになるというような、対外的に許容できないことが起こらないように活動した甲斐があったと言えるでしょう。通称のグローバル30（G30）という言い方は、とくに外国向けに関しては変更なく使用して良いことになっています。事業内容の組み立て直しの要点は、採択された13大学だけの国際化と

いうことでなく、その成果を国際化を目指す他大学とも連携して共有し活用すべく、そのような大学間連携ネットワークの形成を推進すること、加えて人材育成・就職支援の面で産学連携を進めることの2点と言えます。本学もこの方針に従って組み立て直し、平成23年度の予算申請を行う準備を進めています。

また、大学の世界展開力強化事業（「キャンパス・アジア」中核拠点支援、米国大学等との協働教育創成支援）学生の双方向交流の推進（新たに3ヶ月未満の派遣7000名、受入7000人を支援対象に追加）の2つについても、予算措置がされました。文部科学省のホームページでご確認の上、関心をお持ちの先生方は、申請についてご検討されることをお勧めします。

JUNBA サミット会議

JUNBA というのは Japanese University Network in the Bay Area の略称で、サンフランシスコベイエリアに拠点を設けている大学のネットワークで、日本学術振興会サンフランシスコ研究連絡センターの支援を受けて活動しています。今年が5回目の開催となったJUNBA2011 サミット会議（学長・副学長級の会議）は「外から見た日本の大学の国際化—日本の大学は国際化されたのか—」というテーマで2011年1月7日（金）San Francisco Airport Marriot ホテルで行われました。文部科学省の小松審議官、日本学術振興会の小野理事長、在サンフランシスコ総領事の猪俣総領事らが出席しました。今回はこれまで併設されていたテクノロジーフェアが開催されませんでした。技術移転を目指したのですがあまり効果

が現れなかったようです。

会議の内容は別途本誌（46ページ参照）で紹介されておりますのでここでは省略しますが、JUNBAのメンバー大学は9大学（東北大学、大阪大学、九州大学、鹿児島大学、横浜市立大学、法政大学、東京理科大学、福岡工業大学、桜美林大学）となりました。その他に京都大学、筑波大学、名古屋工業大学、豊橋技術科学大学等からも参加があり、ベイエリアに関心のある大学が増えていることが分かります。大阪大学が開発した研修プログラムや遠隔講義については、他大学の拠点も次々と同様のプログラムを実施するようになってきており、本学の教育に重点を置いた海外拠点運営・拠点活動は他大学にも大いに影響を及ぼしていると言えます。



産学連携による人材育成を目指す

協働育成型イノベーション創出リーダー養成プログラム(CLIC)

産学連携推進本部イノベーション創出部

【概要】

大阪大学では平成20年8月より、文部科学省科学技術振興調整費からの補助により「協働育成型イノベーション創出リーダー養成プログラム」を全学挙げて推進しています。これは新しい博士人材像を大学と産業界が協働して養成することを目標としています。産業界から期待される博士人材の育成を目指して、企業等における長期インターンシップと、それと並行して実施されるキャリアデザインプログラムが中心となります。このプログラムにより養成された博士人材が産業界においてイノベーションを創出する次世代のリーダーとなることを目指します。また、この取組を大学院のシステム改革につなげ、大学がより一層社会に貢献できることを期しています。

【事業の背景】

1990年代から始まった大学院重点化計画、そして1996年の第1次科学技術基本計画の「ポストクー万人計画」により博士号取得者が飛躍的に増加しましたが、その受け皿としての大学・企業の採用定員が増えず、現在博士号取得者のキャリアパス形成に深刻な混乱が生じています。

大阪大学においても、ポストクは1000人規模となり、このような状況を打開するために、平成18年から文部科学省の「キャリアパス多様化事業」に参加し、積極的にこの問題に取り組んできました。産学連携プロジェクトを活用して人材育成を行う「プロジェクト活用型キャリアパス創生」を基本コンセプトに掲げ、博士号取得者が活躍できる環境を、産業界に拡張することを狙ったものです。CLICは、その後継プロジェクトとして、平成20年度より総長のリーダーシップの下、全学的規模で強力に推進されています。

【制度の説明】

CLICのプログラムは次の3つから構成されます。

■ 長期インターンシップ

企業等で3カ月間のインターンシップを実施します。企

業から提示される課題に取り組む「課題解決型」と、博士人材側から企業等に提案する「課題提案型」の2パターンあります。インターンシップ期間中は大阪大学が特任研究員として雇用し、原則給与を支給します。

■ キャリアデザインプログラム

自らのキャリアをデザインする力をワークショップ等を通して養成する「キャリア・ダイナミクス・デザイン」、インターンシップを通して修得した気づきを共有し、課題を抽出するための「セルフプロデュースプログラム」、産業界等との情報共有・出会いの場としての「イノベーションフォーラム」を実施しています。



木川田教授によるキャリア・ダイナミクス・デザインの教授風景



キャリア・ダイナミクス・デザインで活発に議論する博士達

■ イノベーション創出データベース

博士人材や教職員、さらには産業界のイノベーション創出に関心のある人たちが集い、意見交換をし、つながって行くための SNS 型バーチャルコミュニティ「CLIC-ON」と、博士人材の動態を把握するための「動態データベース」を運営しています。



SNS サイト「CLIC-ON」のトップページ

【これまでの取組状況】

CLIC がスタートして 2 年半が経ちましたが、その間 20 名のポスドク、25 名の博士後期課程学生が参加しました（平成 23 年 1 月 15 日現在）。CLIC 終了後に企業等に活躍の場を見出した方は 15 名、助教等アカデミアに進んだ方が 2 名となっており、広い視野で博士人材としての可能性を広げる良い契機となっています。

また、若手研究者と産業界との接点を創出する目的で、7 回の CLIC イノベーションフォーラムを大々的に開催してきました。一方、若手研究者と企業との直接のマッチングの場として、少人数に絞った企業説明会も開催してきました。

これまでに 400 名近いポスドク・博士後期課程学生からコンタクトがあり、また 50 社を超える企業にインターンシップの受け入れを快諾して頂いています。



IDEO トム・ケリーの講演

【体験者の声、アンケート結果】

インターンシップ受入企業や参加者のアンケート結果によると、ほとんどの企業、参加者が「よかった」と答えています。

受入企業側の感想としましては「即戦力として雇用（インターンシップ後就職）に至った」「中堅社員と遜色ない成果を出した」という評価をいただくと同時に、「専門的な知識と共に、実験などで培った探求力を仕事にも活かして欲しい」といった博士の Transferable Skills に期待している声もあります。

参加者の感想としましては「アカデミア以外で自分のスキルが通用することが分かった」「博士としての働き方について、博士としての特性の活かし方について、じっくりと考える機会になった」等自分について新たな発見があったという内容が多く見られます。

【これからの取組】

文部科学省科学技術振興調整費からは平成 25 年 3 月までの後 2 年程は補助が得られますが、その後は自立する必要があります。

運営の母体を「若手研究人材養成センター（仮称）」に継承し、学内の全ての部局と連携をしながら、大学院高度副プログラムや副専攻プログラムといった取組との整合を取りながら CLIC 事業を継続運営する計画です。

また、平成 23 年 6 月に供用が開始されるテクノアライアンス棟を拠点として、「Internship on Campus」のスローガンの下産学連携による人材育成をより協力的に推進してまいります。

【コンタクト情報】

大阪大学 産学連携推進本部 イノベーション創出部
イノベーション人材育成部門

〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 2 - 1

先端科学イノベーションセンター先導的研究棟 6 階

TEL : 06-6879-4136 FAX : 06-6879-4134

E-mail : info@uic.osaka-u.ac.jp

URL : <http://www.uic.osaka-u.ac.jp/led/index.html>

研究者のための交流サイト

CLIC-ON : <http://www.handai-clic.jp>

第26回 湯川記念講演会

総合学術博物館湯川記念室の定例行事として毎年開催している湯川記念講演会が、本年度も日本物理学会大阪支部との共催、日本物理教育学会近畿支部の後援により、10月10日(日)大阪大学中之島センターにおいて開催され、幅広い年齢層の約150人が参加しました。

『フェルミ・ガンマ線宇宙望遠鏡で観る高エネルギー宇宙像』と題し、大杉節広島大学教授が、最新の衛星望遠鏡開発の経過、および、その宇宙望遠鏡によるガンマ線バースト、パルサー、暗黒物質等の探索の成果と今後の見通し



大杉教授

について、わかりやすく解説されました。次に、唐山英明富山県立大学准教授が『脳情報による新しいヒューマンインタフェース技術』と題し、人間や動物の脳からの信号をいかに読み取るか、それをコンピュータにより、実際の認識、手足の動きに変換する技術などを興味深く解説されました。

どちらの講演も、聴衆からは熱心な質問が続出し、知的好奇心を呼び起こす有意義なものとなりました。



唐山准教授

(湯川記念室)

文学研究科 グローニンゲン大学講師Margriet Van Der Waal氏の講演会開催

文学研究科では、2008年よりErasmus Mundus Master Programme (Euroculture) のヨーロッパ域外パートナー校として参加し、毎年数名の留学生を受入れています。このプログラムの一環として、研究者の訪問も受けており、今年はグローニンゲン大学からMargriet Van Der Waal講師を迎えました。

10月29日(金)には、文学部の大会議室において、Van Der Waal講師による“The plurality of the human condition: aspects of European cultural identity”というテーマでの講演会が開催されました。この講演会には、



講演会の様子



親睦会の様子

Erasmus Mundus Programmeの留学生を含め、多くの学生や教員が熱心に聴講し、EUが抱える課題を含め現在のEUについての知識を深める機会となりました。講演終了後には質疑応答が行われ、EU外部からの視点で投げかけられた質問によって、講演者自身、今後の研究を進めるうえでの刺激となったようです。また、講演会終了後には親睦会を行い、参加者一同大変有意義な時間を過ごすことができました。

(文学研究科・文学部)

最先端の物理を高校生に

Saturday Afternoon Physics 2010

高校生を対象に、第一線の研究者が最先端の物理を分かりやすく講義するとともに、実験やゲームも取り入れ、物理や科学に対する興味を引き出そうとするプロジェクト、「最先端の物理を高校生に Saturday Afternoon Physics 2010」が、総合学術博物館湯川記念室の主催、本学理学研究科、工学研究科、基礎工学研究科、大学教育実践センター、核物理研究センター、レーザーエネルギー学研究センターの共催で、10月16日(土)から11月20日(土)までの6週にわたり、豊中キャンパス理学部大講義室で開催されました。

毎土曜日午後3時から6時までの授業は、(1)基幹講義：自然界の様々な世界を訪ねる(2)コーヒープレイク：実験デモ、実演、展示、交流、Q & A(3)実践講義：生きる物理、応用される物理、ゲーム、の3部で構成され、自然の謎を解き明かす最先端の物理を駆使して、宇宙から極微の世界を探索するとともに、我々の社会にこうした知識と技術がいかに生かされ実現されているかなど、未来への展望を含めてわかりやすく解説されました。

毎回、平均140人が参加し、講義終了後には学内外から集まった講師たちに活発な質問を行うなど、「知りたい、学びたい」と思って自主的に参加した高校生の好奇心を満たすものとなりました。申込者のうち149人は4回以上参



加しました。

また、工学研究科、レーザーエネルギー学研究センター、核物理研究センターにおける最新研究設備の見学も行われるなど、参加者にも好評のうちに全プログラムが終了し、最終日には、小泉潤二理事・副学長名で修了証書が授与されました。

詳細はホームページ <http://www.yukawa.phys.sci.osaka-u.ac.jp/SAP/> に掲載されています。6週間にわたって大学が高校生に提供するこのプログラムは、本学湯川記念室が2005年から始めた日本初の試みですが、今回も盛況のうちに終了しました。(湯川記念室)

第29回

大阪大学千石会総会開催

11月12日(金)午後4時からコンベンションセンター会議室1において、会員52名の出席のもと、第29回千石会総会が行われました。

「大阪大学千石会」は、本学に事務系職員として在職し、退職した者が、終生互いに交流し親睦を重ねることを目的として、昭和57年5月に結成されたもので、正会員415名、本学の現職事務系職員である賛助会員74名の計489名により構成されています。

当日は、前会長である辻 仁顧問と阪本 重男新会長の挨拶で始まり、議事に先立ち、物故者の報告と黙祷が行われ



総会の様子



尾山理事・副学長による報告

ました。

引き続き議事に入り会員の異動報告、役員の交替、会計報告について協議が行われた後、同会の顧問である 尾山 眞之助理事・副学長から「大阪大学の近況報告」と題して本学の活動状況について報告があり、出席者は熱心に耳を傾けていました。

総会終了後、場所を銀杏会館レストラン「ミネルバ」に移し賛助会員を交えて懇親会が賑やかに行われ、次回総会での笑顔の再会を誓い、盛会裡に終了しました。

(総務部総務課)

産業科学研究所 環境美化(一斉大掃除)実施

産業科学研究所では、毎年恒例の所内環境美化のための一斉大掃除を11月10日(水)に実施しました。白濱総務課長からの実施要領の説明の後、晩秋の柔らかい陽射しながらも肌寒い中、耐震改修工事のため産研に一時的に入居している工学研究科の関係者も含めて、総勢300名余りもの教職員及び学生が参加しました。参加者は4班に分かれて、約2時間にわたり、産研敷地内及び周辺一帯の通路の落ち葉拾いを中心に、排水溝などの土砂上げ、ゴミの収集作業



などを行い、ビニール袋や土嚢袋に収められた大量の落ち葉や土砂等を4台のリヤカーを使って汗を流して運搬しました。

清掃が終わった後の所内は、見違えるようにきれいになり、参加者一同爽やかな気持ちとなりました。

また、安全衛生の観点から研究室周辺の廊下やエレベータ付近等についても、整理整頓を行い、環境美化に対する意識向上を図ることができました。



(産業科学研究所)

文学研究科・文学部 ハラスメント防止のための教職員研修会

文学研究科・文学部では、11月25日(木)にハラスメント問題委員会主催による教職員を対象とした研修会を開催しました。講師として、名古屋大学学生相談総合センターで学生相談に携わっていたご経験のある加藤容子准教授(椋山女学園大学)をお招きし、「学生支援の観点から考えるハラスメントの予防と対応について」というタイトルでご講演いただきました。

近年、研修会に関するアンケートで、アカデミック・ハラスメントやパワー・ハラスメントも扱って欲しいとの声



が多数ありました。また11月には研究科内の性差別問題委員会をハラスメント問題委員会へと改組・改称し、ハラスメント問題全般に対応できる体制を確立したことも踏まえて、今年度の研修会のテーマを設定しました。ただし、どのような事例がアカデミック・ハラスメントやパワー・ハラスメントにあたるか、といったような事例の紹介ではなく、ハラスメントが起こりにくい組織風土や人間関係とはどのようなものなのかということを主題として、具体的には、学生が教職員のどのような対応をハラスメントと感じる可能性があり、したがって教職員はどのような対応を心がけなければならないか、といった事柄を、学生支援の経験に基づいてお話しいただきました。

学生の言葉に耳を傾けるとか、学生との相談には時間と場所の設定が重要であるといった、言われてみればなんでもないことかもしれませんが、日常的には見過ごしがちな数々の指摘があり、大変有益でした。また、活発な質疑応答があり、学生との今後の対応に関して非常に参考になった教職員が数多かったことと思われます。

これからも、ハラスメントのない教育・研究・職場環境を目指してゆきたいと思います。

(文学研究科・文学部)

公開講座「くすりと医療」開催

平成22年度大学院薬学研究科公開講座が、11月13日(土)、27日(土)の2日間にわたって本研究科2号館4階特別講義室を会場として開催されました。

本講座は、薬学部6年制が導入され、薬剤師、薬学研究者の専門的かつ幅広い知識が益々必要とされている現在、生涯教育の一環として「くすりと医療」と題し、最新の知見をもとに薬学の現在の課題と将来への展望について、それぞれ最先端の分野で活躍する6名の講師により語っていただきました。薬剤師を中心に、幅広い年代層にわたる約30名が受講しました。

開講に当たって、今回の公開講座の座長である藤岡弘道教授の挨拶と開講についての趣旨説明があり、本研究科所属の中川晋作教授、前川智弘特任准教授、青山 浩准教授、田熊一敬准教授、本学微生物病研究所の岡部 勝教授及び国立循環器病研究センター研究所の森崎隆幸分子生物学部長より講義が行われました。各講義は、感染症対策に向けた貼るワクチンの開発、水素同位体の化学、最先端タンパク質結晶学と医薬品探索、環境因子の活用による薬物標的分子の探索、遺伝子操作マウスを通して見えてきた遺伝子の不思議、幹細胞からの心筋前駆細胞の単離など、医療薬



講義風景

学、医薬品と人との接点に関わるテーマで行われ、科学的基盤から医療に至る広範な内容をご紹介いただき、受講生は熱心に聞き入っていました。

また、最終日に行ったアンケート調査では、内容的には極めて高く評価され、参加者から今後の本講座への強い期待が寄せられました。

(薬学研究科・薬学部)

彩都サンデーサイエンス2010出展

第4回科学技術の文化祭「彩都サンデーサイエンス2010」が、11月28日(日)に茨木市彩都で開催され、理学研究科技術部および産業科学研究所技術室が出展参加しました。

この催し物は、様々な世代の方が気軽に科学技術と触れ合う「文化祭」として、現在の生活に役立つ身近なものから、将来の生活に役立つ先端科学技術までを題材とし「ふしぎ発見ゾーン」および「ふしぎ体験ゾーン」などの4会場で開催されました。



理学研究科技術部の出展風景



産業科学研究所技術室の出展風景

大阪大学からは「ふしぎ体験ゾーン」会場に、「ふしぎ、なぜ見える?どんな色?どんな顔?」(理・技術部)および「光の回折現象とホログラム」(産研・技術室)のタイトルで出展し、それぞれの原理などを説明しながら、参加者に実際に工作やパソコン操作などを通して、科学の一端を体験してもらいました。

ブースを訪れた子供たちに科学の不思議と感動を伝えることができ、大好評のうちに終了することができました。

(理学研究科・理学部、産業科学研究所)

平成22年度 名誉教授会の開催

毎年恒例の名誉教授会が、11月18日(木)午後4時30分からリーガロイヤルホテル「山楽の間」において、名誉教授70名と名誉教授会から招待された総長、理事、監事及び部局長等39名の出席のもと開催されました。

世話人の鈴木 胖名誉教授(工学部)の司会により、ご逝去された先生方への黙祷で始まり、秋の叙勲で瑞宝中綬章を受章された大路清嗣名誉教授(工学部)から受章者代表の挨拶を頂きました。続いて、劇作家・演出家で本学コミュニケーションデザイン・センターの平田オリザ教授から「コミュニケーションデザインとは何か?」というテーマで講演が行われ、その後、鷲田清一総長から、本学の近況報告が行われました。



大路名誉教授



平田教授



鷲田総長



名誉教授会世話人と歴代総長による万歳三唱(写真左から
鈴木誉教授、鷲田総長、多胡名誉教授、岸本元総長、金森元総長)

引き続き開催された懇親会では、鷲田総長から出席部局長等を紹介の後、加藤四郎名誉教授(微生物病研究所)の発声による乾杯で開宴し、お互いの近況報告など旧交を温めながら、終始和やかな雰囲気の中で懇談が行われました。

また、鈴木 胖名誉教授から新しい世話人として、多胡圭一名誉教授(法学部)の就任が報告され、最後に名誉教授会世話人(鈴木 胖名誉教授及び多胡圭一名誉教授)と歴代総長(金森順次郎元総長、岸本忠三元総長及び鷲田清一総長)を中心に、本学の益々の発展と互いの健康を祈念し、万歳を三唱し、盛会のうちに閉会致しました。

(総務部秘書課)

工学研究科 防災訓練を実施

工学研究科では12月1日(水)、教職員および学生約400人が参加して、大規模地震により火災が発生したことを想定した総合的な防災訓練を、吹田市北消防署にご協力いただき実施しました。

今回の訓練では、地震発生時の安全確保、火災発見通報、初期消火、避難誘導、防護措置、搬出、救護など一連の訓練を実施するとともに、責任者の役割を確認しました。



その後、消防署員の指導による屋内消火栓を使用しての放水訓練および消火器の取扱訓練も行いました。

訓練後、馬場章夫工学研究科長から、日頃から火災だけに限らず、事故を起こさないよう各人が防災意識を高めてほしいとの挨拶がありました。

当日は天候にも恵まれ、講義中の学生も避難訓練に参加するなど、全員熱心に訓練に取り組んでいました。



(工学研究科・工学部)

“Symposium on Research-Based International Educational Collaboration and Exchanges 2010 in Osaka”

- International Training Program(ITP)/大航海 symposium -

理学研究科における目覚ましい国際交流の一環として、12月1日(水)、豊中キャンパスのチューデント・commonsにおいて「インターナショナル・トレーニング・プログラム(ITP)と大航海プログラムのシンポジウム」が開催され関心のある教職員や学生が100人近く参加しました。

ITPでは、オランダのグローニンゲン大学を窓口にして、欧州の大学へ若手研究者を長期派遣することにより、国際性を身に着けた研究者の育成を目的に、過去3年間で40

名ほどの派遣実績をあげています。また、大航海プログラムでは大阪大学の各海外拠点を窓口に、欧州、北米、アジアの大学等へ長期派遣、国際会議等の短期派遣も行っており、この1年間に100名近い若手研究者を派遣しました。

シンポジウムは、3部に分けて構成され、第1部では、同プログラムで欧州に派遣された若手研究者から欧州での生活や研究環境を楽しむ話題も織り交ぜて報告があり、今後派遣希望の若手研究者にとっては、貴重な報告となりました。第2部では、欧州の大学で日本の若手研究者を受け入れた教授及び国際部事務職員から日本の若手研究者の受け入れや各大学での国際化について、EU日本代表部広報担当者からは欧州と日本の大学教育での協力関係や欧州同窓会組織についての講演をいただきました。第3部のパネルディスカッションでは欧州及び日本の大学にとっての国際化について活発な討論と意見交換が行われました。

この後場所を移して、懇親会場でも引き続き貴重な意見交換が行われ、更なる国際化を目指す理学研究科教職員や学生にとって大きな成果のあるシンポジウムとなりました。

(理学研究科・理学部)



ステューデント・commons1周年記念ウィークを開催しました!!

大学教育実践センターでは、ステューデント・commons開設1周年を記念して、平成22年11月29日(月)～12月3日(金)までの1週間、ステューデント・commonsの各施設を利用して、さまざまなイベントを開催しました。

11月29日(月)

12:00～13:00 「ひとこといちば」スペシャル(主催:大学教育実践センター)

竹村 景子先生(世界言語研究センター所属)をゲストにお迎えして、「東アフリカの衣と食」をテーマにミニトークを行いました。学生・教職員が30名ほど参加し、ケーキやお菓子を食べながら、またアフリカで実際に使われている布や調理道具を見たり触ったりしながら、和やかな雰囲気の中、参加者は楽しく先生の話聞いていました。



13:00～15:00 PROJECT 2020 ―新たな社会的価値を生む―(主催:学際融合教育研究センター)

平成22年10月15・16日に開催した「学生交流学際融合教育セミナー(学際融合教育研究センター主催)」でのグループ討議の成果を展示しました。このセミナーは、「高度副プログラム」を受講している様々な研究科の学生や、興味を持つ学部が一堂に会して語り合う機会として開催されたものです。



11月30日(火)

13:00～14:00 共通教育賞表彰式(主催:大学教育実践センター)

平成22年度第1学期に授業を担当いただいた先生方を対象に、総長から学生の推薦などによるベストティーチャー等を表彰しました。今回は、初受賞者10名、再受賞者8名の合計18名の先生が受賞されました。また、ステュー

デント・commons1周年記念ウィークということで、受賞者の中から吉川徹准教授(人科)と安田誠准教授(工)にスピーチしていただきました。



14:00～16:00 総長カフェ(主催:大学教育実践センター)

総長と学生との対話の機会を設け、約2時間にわたって、「学び」や「教養」などについて自由に語りました。

約100名の学生・教職員の参加がありましたが、参加した学生からは、「普段なかなか会うことのできない総長を身近に感じられる良い機会だった。」などの感想が寄せられ、参加者にとっては、貴重な経験となりました。なお、Wニ博士のデビューの報告もありました。



12月1日(水)

12:00 ~ 13:00 パンキョー革命：学生・職員交流イベント(主催：大学教育実践センター)

大学教育実践センター教務係の松本さんを迎え、普段はなかなか知ることのできない教務係の仕事の紹介を通して、学生と職員の交流を促進するイベントを実施しました。当日は、他の教職員や学生合わせて30名ほど参加し、ケーキや昼食を食べながら、和やかな雰囲気の中、参加者は楽しく対話していました。このような企画を通じて、教職員・学生協同で阪大をよりよい大学に変えていく動きが出てくることを期待します。



16:30 ~ 19:00 留学生日本語スピーチコンテスト (Speech Contest in Japanese) (主催：国際教育交流センター)

大阪大学在籍の留学生が「私の異文化体験」をテーマとし、日本での体験を日本語で5分間スピーチしました。優秀賞などの4名の表彰を行った後、参加者で簡単なティーパーティーを行いました。このコンテストの詳細は国際教育交流センターにお尋ね下さい。



12月3日(金)

12:30 ~ 14:30 古本マルシェ

カルチエに寄贈された本等の一部を学生に無料配布しました。



集まった学生は、専門的な書物や一般的な小説まで約200冊の書籍の中から、思い思いの書籍を吟味し、持ち帰っていました。学生の「読書離れ」と言われて、久しいですが、阪大生には、関係ない話(!?)なののでしょうか。

18:15 ~ 20:00 留学生懇親会 (International Student Party) (主催：大学教育実践センター)

グローバル30の留学生や日本人学生など総勢200名以上をお迎えして開催しました。たくさんの料理やドリンクを囲みながら参加者同士で盛んに交流が行われていました。また、琴・尺八の演奏(阪大公認団体「銀簫会(ぎんしょうかい)」の皆さん)や「ワニ博士」の着ぐるみも登場し、大盛況のうちに閉会しました。



18:00 ~ 20:00 カフェ「知のオープンアクセス」第1回(主催：附属図書館 共催：コミュニケーション・デザイン・センター)

ゲストの榎木 英介先生(サイエンス・サポート・アソシエーション(SSA)代表、病理医)より「社会の中で研究する」と題してお話いただき、オープンアクセスとの関わりについて理解を深めるカフェを開催しました。

平成22年度 後期1年生クラス代表懇談会報告

12月2日(木)の昼休み(12時10分 - 12時50分)を利用して、1年生の後期クラス代表懇談会がステューデント・コモンズ2階セミナー室で開催されました。この懇親会は、センター専任教員と学生のクラス代表で構成し、授業・カリキュラムや学習環境など大学教育実践センターが関係する問題全般について、センター専任教員と学生で話し合うために開催されていますが、今回は事前アンケートで、ガイダンス室に対する意見の収集を行いました。本部からは太刀掛俊之准教授、脇坂道久情報基盤課専門職員、岡本安生学生支援課学生サービス第二係長を迎え、1年生のクラス代表は、49名が参加、教職員は22名が参加しました。

はじめに工藤真由美センター長から、「大学を良くしていくのは学生自身であるから、積極的に自分の意見を述べ



て頂きたい」とのご挨拶がありました。続いて中村征樹准教授、堀一成准教授から、学習支援サイトについての説明がなされました。服部憲児准教授からは、映像を用いてパンキョー革命の説明がありました。また、窪田高弘カリキュラム開発部門長からは、12月1日(水)からガイダンス室で開始した、先輩学生、大学院学生による学習相談の説明がなされました。



その後学生からの自由な発言を求めたところ、構内の整備、実践センター内における無線LAN、図書館の開館時刻、箕面直行バスの運行、部室の24時間使用、空き時間における教室の使用、掲示板の増設、保健センターにおけるインフルエンザ予防接種、等々について要望が出されました。また外国語学科での授業の選択方法についての要望もありました。出された要望、意見については、その場で担当者が回答できる範囲内で回答しましたが、他部局に関することは、そちらに意見を伝える予定にしています。

(大学教育実践センター)

文学研究科 平成22年度FD講演会を開催

文学研究科では、12月2日(木)の午後、文学研究科大会議室において、研究科内評価・広報室と教育支援室の主催でFD講演会を開催し、約40名の参加を得ました。講師には保健センター吹田分室内学生相談室の石金直美准教授を迎え、「学生を育てるコミュニケーションのありかた—学生相談室からみた、今どきの阪大生気質—」という題で講演が行われました。内容は、FDの基盤として教員がどのように学生と接すればよいかという講習で、まず学生相談室における学生相談の増加傾向と学部別比率や相談内容が示された後、大学内の相談ネットワークにおける連携の



石金准教授

ありかた、昨今の学生をめぐる状況と現在の学生の抱える不安、今どきの阪大生気質、学生を育てるコミュニケーションのありかたへと話しが進み、最後に学生支援における心構え



講演会の様子

として重要なポイントが提示されました。

その後、活発な質疑応答が交われ、盛況のうちに講演会は終了しました。講演会終了後、引き続き、講演会参加者の有志と石金准教授による座談会がもたれました。座談会では、学生支援に関する種々の具体的な問題に関する質問や相談が次々と行われ、今後の学生支援に向けて大いに参考となる機会となりました。

(文学研究科・文学部)

文学部・文学研究科 親睦パーティー—留学生とともに—

文学研究科・文学部では、12月2日(木)に福利厚生棟4階食堂で親睦パーティーを開催しました。毎年恒例の親睦パーティーも、今回で第30回目を数えることとなり、文学部・文学研究科の学生と教職員を中心に、他学部・研究科の学生など100名あまりの参加者が集いました。

パーティーは留学生の司会のもと、片山剛研究科長の挨拶についで、大庭幸男副研究科長による乾杯でスタートしました。今年は司会者が日本語、中国語、英語を駆使し



研究科長・副研究科長の挨拶を聞く参加者

て、パーティーを円滑に進行するなど大活躍し、途中で行われるゲームについても参加者全員が楽しめるものとなりました。日頃はゆっくりと話す機会の少ない学生、教職員との親睦を図る良い機会となりました。

デザートをはさんでのカード合わせのゲームは、参加者の協力もあってスムーズに進行し、用意された景品がすべて渡されたところで、永田靖副研究科長の挨拶をもってパーティーは盛会のうちに終了しました。



ゲーム進行の様子

(文学研究科・文学部)

理学研究科 外国人留学生懇親パーティー開催

平成22年度理学研究科外国人留学生懇親パーティーが、12月3日(金) 豊中キャンパス福利センターにおいて開催されました。

パーティーには、国際交流の盛んな豊中ロータリークラブの代表の方々をお迎えし、外国人留学生、外国人研究者、指導教員、チューター学生及び国際交流に理解のある教職員・学生等115名が参加しました。浦川 理留学生担当講師の進行で、東島 清理学研究科長の開会挨拶、黒河 洋豊中ロータリークラブ会長の挨拶に続き、篠原 厚評議員の発声による乾杯で始められました。



パーティーでは、本学学生のお祭りダンスサークル“祭^マ楽^タ人”が、よさこいダンスパフォーマンスを演じ、そのあと、職員によるけん玉の実演が行われました。けん玉の実演では、留学生や出席者が振ってけん玉に挑戦し、大いに盛り上がりました。留学生にとっては、日頃接することの少ない方々と懇談することで、懇親を深める良い機会となりました。

最後に、滝澤 温彦国際交流委員長の閉会の挨拶があり、名残を惜しみつつ散会となりました。

(理学研究科・理学部)

平成22年度 リーダーズ・アセンブリー実施

12月4日(土)に本年度のリーダーズ・アセンブリーを学生116名及び教職員23名の参加のもとに豊中キャンパスの大学教育実践センター大講義室において実施しました。

このアセンブリーは、体育系学内各クラブのリーダー、若しくは次期リーダーとなる者を集めて研修を行い、講演や講習を通してリーダーの意義と素養を深め、また各クラブが抱える諸問題について協議し、それに対する解決策や改善策を話し合うこと、体育会各クラブの士気を高めると同時に、各クラブ間のお互いの理解・親睦を深めることを目的として例年12月の第1土曜日に実施しているものです。

まず、大垣一成学生生活委員会委員長の挨拶に始まり、(株)リンクアンドモチベーションの川内氏による「モチベーションの維持について」と題して、部員のモチベーション維持のためにリーダーとしてすべきことは何かの解説がなされました。

続いて、山本 仁安全衛生管理部教授による「課外活動におけるリスク管理」と題して薬物問題とアルコールの問



懇親会にて挨拶を述べる総長（カフェテリアらぶおれに於いて）



講演を聞き入る学生達（大講義室に於いて）



参加者全員（大講義室に於いて）



閉講式で挨拶を述べる小泉理事・副学長（大講義室に於いて）

題についての講話がありました。

さらに、柔道整復師の島津氏からは「傷害予防と回復について」を演題に、限られた練習時間、期間、エネルギーを如何に有効に活用し結果に結びつけるか、いち早く疲労から回復し、傷害を未然に防止するための考え方を理解するか、また、既に抱えるスポーツ傷害を克服するための考え方を理解するかなどの解説がなされました。

分科会では参加者を9つのグループに分け、部をまとめる方法、新入生の勧誘についてなど、班別議題として事前アンケート等を基に設定された議題を取り上げ、活発な意見交換が行われました。

夕方に行われた懇親会では、鷲田清一総長（体育会会長）から、今年は全国七大学総合体育大会（七大戦）にて総合優勝を果たしたところですが、2011年は創立80周年でもあることから連続優勝するなど創立80周年記念yearに相応しい成果を挙げてくれるよう期待している旨の力強い激励の言葉をいただきました。

また、今回は数名の顧問教員にも参加をいただき学生に励ましの挨拶をいただきました。

最後に、本年度体育会六賞受賞クラブの発表と決意表明に加え、全てのクラブの代表者が壇上で今後の活動についての決意表明を行い、平成22年度のリーダーズ・アセンブリーを終了しました。

（学生部学生支援課）

文学研究科・平成22年度 研究教育フォーラム(教員研究会)開催

文学研究科では、毎年、秋から冬にかけての時期に、分野を異にする教員がその研究成果を報告し、さまざまな研究動向について相互の理解を深め、かつ研究科内の研究活動のさらなる活性化と連携を図るFDの意味をもたせた「研究教育フォーラム」を開催しています。同フォーラムには名誉教授も招き、また研究発表後の懇親会開催とあわせて、研究交流を促進するコミュニケーションの場ともなっています。

通算41回目となる今年は、12月9日(木)、飯倉洋一教授(日本文学)の「偽りと倫理 - 上田秋成の晩年」、小林茂教授(人文地理学)の「近世東アジアの疾病空間 - 天然痘と麻疹の流行秩序と小規模社会」というふたつの報告がおこなわれました。

本年に京都国立博物館で開催された大規模な「上田秋成没後200年記念展」にも参画した飯倉教授の報告は、『春雨物語』の詳細な検討にもとづき、秋成晩年における倫理意識と表現意識の葛藤に光を当てるもので、随所に新解釈を盛り込んだ意欲的なものでした。小林教授は、さまざまな歴史資料から明らかになった天然痘および麻疹の流行秩序を東アジア世界各地の地域的特性と関連させて「疾病空間」としてとらえる、スケールの大きな研究を提示しまし



た。いずれも、綿密な資料調査をふまえた創意溢れる報告で、本研究科教員の研究活動の充実を示し、50数名以上が終始熱心に参加しました。

待兼山会館に場を移しての懇親会では、天野文雄名誉教授(演劇学)、玉井暉名誉教授(英米文学)、根岸一美名誉教授(音楽学)も交えた30名あまりが、論談風発の爽りあるひとときをすごしました。

(文学研究科・文学部)

韓国・教育科学技術部(文部科学省相当)関係者の訪問について

12月13日(月)に韓国教育科学技術部(文部科学省相当)芸術研究政策室研究環境安全課長の田基秀(ジョン・ギス)氏ほか3名の方々が本学を訪問しました。

西田安全衛生管理部長(理事)から挨拶の後、山崎副部長(施設部長)、富田講師、樽井安全衛生管理課長が同席し、



(前列左) 田(ジョン)研究環境安全課長
(後列中央左) 山崎安全衛生管理部副部長

両国間の安全衛生に係る情報交換が行われました。

情報交換会後、工学研究科へ移動し、馬場章夫工学研究科長が出迎えた後、訪問者一行は、神戸研究室及び茶谷研究室を見学し、説明に対し熱心に耳を傾ける一方、写真撮影をするなど情報収集に努められていました。



(左から4番目): 工学研究科・神戸教授
(安全衛生管理部、工学研究科)

「懷徳堂文庫」資料修復研修会を開催

附属図書館では、12月16日(木)に近畿地区国公立大学図書館職員を主な対象として、「懷徳堂文庫」資料修復研修会～修復技術の今・昔～を開催しました。

この研修会は、平成21年度に大阪大学後援会及び朝日新聞文化財団の助成を受け実現した「懷徳堂文庫」を代表する谷文晁作「帰馬放牛図」を始め著名な資料33点の修復・保存の成果報告を兼ね、定期的を実施している「図書関係業務研修会」として企画されました。

研修会には、学内の教職員、学生37名のほか、近畿地区の大学図書館の職員ら計66名が参加しました。



講義の様子



展示された資料に見入る参加者

湯浅邦弘文学研究科教授による「懷徳堂文庫」に関する歴史をふまえた分かり易く丁寧な資料解説が行われた後、修復を担当した経師の伝統を受け継ぐ(株)大入により修復・保存技法とデジタル化技術の解説が行われました。

参加者からは、通常見ることができない修復作業の場面は興味深く、資料の歴史的経緯、修復の考え方、具体的な修復作業と保存工程が相まって、一層理解が深まったとの声が聞かれました。

(附属図書館)

歯学部附属病院で「第11回年末ふれ愛コンサート」を開催

大阪大学歯学部附属病院で、恒例行事となった「年末ふれ愛コンサート」が12月17日(金)歯学部弓倉記念ホールにおいて開催されました。会場には開演前から多くの患者さんやその家族の方々が来場され、和やかなムードの中、トナカイとサンタに扮した歯科医師の司会で幕が上がりました。ジャグリング、独唱、マジック、サクソ演奏、コーラス、人形劇など、教職員によるパフォーマンスが次々に繰り広げられ、ステージが進むにつれ大きな歓声や笑い、拍手が沸き上がり、デジカメや携帯電話で撮影する姿も見られました。最後は会場内全員で「見上げてごらん夜の星



を」を斉唱し、患者さん、家族の方々、教職員も声を合わせ、気持ちを重ねたステージのしめくくりとなりました。

患者さんからは「先生方の意外な面を見ることができました。」「人を思う真心に感謝です。弱気な心が和みました。」「入院生活が長かったので楽しかったです。プロ並みの芸にびっくりしました。」という声も聞かれ、今年で11回目を数える年末ふれ愛コンサートがその名のとおりに患者さんと病院職員とのふれ愛を深める場になっていることが実感されました。

(歯学部附属病院)

微生物病研究所 微研ミュージアム開館

微生物病研究所では、12月17日(金)に微研ミュージアムが開館しました。開館にあたり、菊谷仁研究所長、東雍(ひがし・やすし)阪大微生物病研究会理事長、竹尾徳治飛鳥樫原ユネスコ協会相談役によるテープカットが行われました。竹尾徳治氏は、微生物病研究所の前身である竹尾結核研究所設立に尽力された、竹尾治右衛門氏のご子孫で今回の招待に「阪大はいつまでも恩を忘れない点が素晴らしい」と感激されました。



引き続き行われた内覧会にはOBも含め200名以上の参加があり、ロベルト・コッホの顕微鏡や海洋堂(株)製作のインフルエンザウイルス模型、数々の歴史的な展示物とともに、大型モニターに次々と映し出される50年以上前の研究生生活を懐かしげに眺めていました。また、最新の研究成果であるE型肝炎ウイルスの分子構造を立体動画(3D)として見る事ができるシステムには多くの入場者が感嘆の声をあげていました。

なお、同ミュージアムは平日9～17時に開館していますので、みなさまのご来場をお待ちしています。(入場自由)



(微生物病研究所)

知的財産センター・法学研究科附属法政実務連携センター主催 公開講義「スポーツと企業のかかわり」

12月8日(水)、知的財産センター・法政実務連携センターでは、富士通(株)総務・ファシリティマネジメント担当課長の岩崎利彦氏をお迎えし、公開講義「スポーツと企業



のかかわり」を開催しました。岩崎氏は元陸上選手で、110mハードルでバルセロナオリンピックに出場、引退後は企業スポーツ広報などを担当されてきました。そういった経験から、スポーツをしてきた人とそうでない人の考え方の違い、一流選手と超一流選手の差は思考力の差であることなど、スポーツと勉強に共通する考え方を具体的な例を交えながらお話していただきました。

参加者からは「スポーツのトレーニング方法は学問にも通じるところが多いことがよくわかり、非常に参考になった」「生まれもった才能ではなく、努力によって超一流は生まれることを知り、励みになった」「夢を実現するためのプロセスを具体的に考える方法がわかった」等の感想が寄せられました。

(知的財産センター、法学研究科)

法学研究科附属法政実務連携センター・学生支援室主催
公開講義「公務員という選択」

法学研究科附属法政実務連携センター・学生支援室・知的財産センター主催
公開講義「厚生労働省の仕事と社会保障政策」

12月21日(火)4限、法政実務連携センター・学生支援室では、キャリア教育の一環として、法学部一年次に配当されているフレッシュマンセミナーの時間を活用して、公開講義「公務員という選択」を開催しました。公開講義では、まず、法学研究科の植松利夫教授から、「公務員として求められる人材について」をテーマにお話いただくとともに、講師として、厚生労働省から大阪府に出向されている熊木正人氏をお迎えして、「公務員という仕事—厚生労働省と大阪府庁に勤務して—」をテーマにお話いただきました。現在、大阪府で障がい福祉企画課長として活躍されている熊木氏からは、実際の経験を踏まえながら、わかりやすく国家公務員と地方公務員の違いについて説明していただきました。一年次生以外の学生にも多数の参加者があり、公務員に対する関心の高さが伺われました。参加者からは、「改めて公務員という仕事に興味を持った。」「今



後の就職活動や大学生活を送る上で、参考になった。」「公務員の採用のプロセスや具体的な仕事の内容がイメージできた。」等の感想が寄せられました。

同日、4限目に開催したフレッシュマンセミナーに引き続き、5限目に熊木正人氏による公開講義「厚生労働省の仕事と社会保障政策」を開催しました。熊木氏は、厚生労働省で介護保険制度や障害者自立支援法の施行や新型インフルエンザ対策など幅広い分野に携わった経験をお持ちであり、その経験を踏まえ、社会保障政策がどのように進められているかなどについてお話いただきました。マスコミ等でもよく取り上げられる厚生労働省の政策について、そ

の難しさと面白さをわかりやすく説明いただき、大学一年次生から大学院生まで幅広い参加者には熱心に聞き入る姿がみられました。参加者からは、「社会保障政策には、自分たちには身近なものが多数あるが、それらについてわかりやすく理解できた。」「テレビ等で話題になっている障がい者自立支援法の経緯が聞けてよかった。」「公務員の仕事の責任の重さや政策決定の難しさがわかった。」等の感想が寄せられました。

(法学研究科・法学部、知的財産センター)

ハラスメント防止等に関する研修会開催

ハラスメント防止等に関する研修会が、人権問題委員会とハラスメント相談室との共催で12月8日(水)に医学部保健学科第一講義室において開催されました。この研修会はセクシュアル・ハラスメント、アカデミック・ハラスメント及びパワー・ハラスメントに関する理解を深めることを目的に企画されたもので、特に新任の部局長、教授、事務系管理職員等及び新規採用職員に参加願ひ、問題意識の向上を図ることとしたものです。

当日は130名を超える参加者があり、本学教職員等のハラスメント問題に関する関心の深さが表れておりました。



吉武教授



角田弁護士

研修会は、高木ハラスメント相談室副室長の司会により、平田人権問題委員会副委員長からの挨拶の後、東北大学高等教育開発推進センター 学生相談所副所長の吉武 清實教授による「アカデミック・ハラスメント、パワー・ハラスメントの防止」- 知っておきたいこと -、また、角田由紀子 弁護士による「キャンパス・セクシュアル・ハラスメント防止のために」と題して講演が行われ、参加した受講者は最後まで熱心に聴講し、ハラスメント防止に対する意識を高めることができました。

(総務部総務課、ハラスメント対策事務局)

GLOCOLプレゼンコンテストを実施

12月16日(木) グローバルコラボレーションセンター(GLOCOL)主催による「GLOCOL プレゼンコンテスト」を実施しました。

GLOCOLは、現場的な感覚と共生への意識を持ち、国際社会に貢献し得る人材を育成するため、4つの大学院高度副プログラム「グローバル共生」「人間の安全保障と開発」「司法通訳翻訳論」「現代中国研究」を全学の大学院生に向けて提供しています。今回、高度副プログラムがめざす「学びから実践へ」を実現する第一歩として、開催したもので



す。このコンテストでは、本学の大学生、大学院生の皆さんが日ごろ大学で学んでいることをもとにした実践の提案や、すでに地域社会や海外で取り組んでいる実践事例を発表してもらいました。審査委員長を小泉潤二理事・副学長に勤めていただき、学内外から3名の審査員をお迎えして審査や活動へのアドバイスをいただきました。

7組の発表者の中から最優秀賞には、箕面地域で「子ども中心型」の学習グループを運営する「虹色の未来教室～楽育共～」が選ばれました。

(グローバルコラボレーションセンター)

附属図書館

クリスマスコンサート2010「室内楽アンサンブルの夕べ」開催

大阪大学附属図書館クリスマスコンサート2010「室内楽アンサンブルの夕べ」が12月21日に総合図書館6階図書館ホールでおこなわれました。

第5回目となる今回は、大阪大学の教職員・大学院生を中心とした「大阪大学室内楽アンサンブル」を迎え、参加者はクリスマスメドレーなどの演奏を一時間にわたって楽

しました。

当日は、あいにくの雨となりましたが、近隣の一般市民を含む88名の参加者があり、「くつろげるコンサートでした」、「毎年楽しみにしています」といった感想が寄せられました。



コンサート会場の様子



(附属図書館)

「ERATO村田脂質活性構造プロジェクト」発足懇談会を開催

日本政府の方策として、科学技術の創造的な研究、とりわけ課題解決を目的とした基礎研究をより一層充実させるため、昭和56年(1981年)に創造科学技術推進事業(Exploratory Research for Advanced Technology; ERATO)を発足させました。

その後、第2期科学技術基本計画や総合科学技術会議の推進戦略など、新しい時代の要請を踏まえ、平成14年度から戦略的創造研究推進事業・総括実施型研究(ERATO)として新たなスタートを迎えました。

この事業は、国内外の研究者による厳しい審査を経て1年に4~5件しか採択されないプロジェクトです。

そして、ERATOは、発足から30年が経過しますが、本年度から「研究総括—大阪大学—科学技術振興機構(JST)」による三位一体の関係(協働実施体制)を基本路線として位置づけ、プロジェクト運営は大学とJSTが密な連携を図り、質の高い研究環境を構築していくものです。

平成22年度に大阪大学大学院理学研究科を研究活動拠点として、新規プロジェクト「ERATO村田脂質活性構造プロジェクト」が発足し、いよいよ活動がスタートします。

これに先立ち、平成22年12月24日(金) JSTと大阪大学が協働実施体制等についての意見交換として発足懇談会を開催しました。

この発足懇談会には、本プロジェクトから村田研究総括、



梅川総括補佐、米澤総括補佐、JSTから眞峯理事、榊原イノベーション推進本部長、小林調査役、楠本パネルオフィサー、大阪大学から鷲田総長、西尾理事・副学長、東島理科学研究科長、篠原評議員、藤木理科学研究科副研究科長、原田理科学研究科副研究科長、鈴木研究推進部長、美濃越理科学研究科事務長が出席しました。

発足懇談会は、JST 眞峯理事、鷲田総長の挨拶に始まり、楠本パネルオフィサーから選考経緯が説明された後、村田研究総括からのプロジェクト概要説明があり、双方の研究支援体制が確認されました。

(理学研究科・理学部)

「OSAKA光のルネサンス2010」へ参加

中之島センターは、12月、中之島地区を会場に開催された「OSAKA 光のルネサンス」(2010.12.11 ~ 12.25)に参加協力しました。本年は中之島センター東隣が西会場(ウエストライトパーク)として中之島スケートリンク等も併設され、大勢の方々が来場されました。

この事業は、本学の第4のキャンパスでもある中之島センターを中心に実施する社会学連携活動の一環として位置づけ、中之島地区の活性化と本学の社会学連携の拠点として広く社会にアピールすることを目的として参加しているものです。

今回は、センター東側壁面全体を外側からライトアップし、LEDフルカラースポットにより、大阪大学のスクールカラーを含めた数種類のカラーチェンジを行い、また、

室内窓枠にはLEDランプをちりばめ、夜空に星屑が瞬く雰囲気を出しました。

今回のライトアップは、中之島西地区の建物で最も際立った光の演出となり、センターの光の演出に多くの来場者のカメラ、ビデオを向ける姿が見受けられ、昨年設置したセンター10階「OSAKA UNIVERSITY」のネームサインも大きく浮かび上がる中、大阪大学を多くの方々にアピールすることができました。

また、期間中23日から25日の3日間にわたって、中之島センター1階ロビーにおいて、大阪大学軽音楽部「SWING」によるミニコンサートを「クリスマス夢灯りコンサート」と題して開催し、ジャズの軽快な音色がクリスマスの中の島を包み、多くの来館者で賑わいました。

(企画部広報・社会学連携事務室)



大阪大学軽音楽部「SWING」によるミニコンサート 12 / 23



大阪大学軽音楽部「SWING」によるミニコンサート 12 / 24



大阪大学軽音楽部「SWING」によるミニコンサート 12 / 25

共通教育に関する懇談会

12月24日(金)に、「共通教育に関する懇談会」が大学教育実践センターステュデント・コモンズにて開催されました。この懇談会は、総長、理事・副学長、監事、共通教育に係る部局長が集まり、共通教育に関する諸問題について懇談を行うもので、毎年開催されています。

今回は、全学出動体制による共通教育の堅持について総



長から要請があった後、小泉理事・副学長から今後の全学共通教育の展望等についての報告がありました。続いて、大学教育実践センターから教養教育の現状報告が行われ、その後懇談となりました。

本学の各部局長が一堂に会し、共通教育を考える貴重な機会となりました。



(大学教育実践センター)

医学部附属病院中央クオリティマネジメント部 平成22年度医療安全教育トレーニング開発シンポジウム「新たな領域への挑戦」開催

医療安全能力向上のための効果的教育・トレーニングプログラム開発事業(平成22年度文部科学省特別経費)による、平成22年度医療安全教育トレーニング開発シンポジウム「新たな領域への挑戦」が、去る12月25日(土)、大阪大学中之島センターにおいて開催されました。

全国各地から医療従事者、教員等、計98名の参加があり、



シンポジウム冒頭には、島居剛志氏(文部科学省高等教育局医学教育課)による講演「医療人養成と大学病院の機能強化に関する取組み」が行われました。

第1部では、BMJ Groupとの特別な契約により、医療の質・安全の領域で最大規模の国際学会“International Forum on QUALITY & SAFETY in HEALTH CARE 2010”の遠隔地参加プログラム(Remote Participation Program)を我が国で初めて主催し、国際的な科学的知見を紹介しました。

第2部のミニワークショップ「ノンテクニカルスキルの臨床への導入に向けて」[座長:中島和江病院教授(医学部附属病院) 矢野真氏(武蔵野赤十字病院)]は、円谷彰氏(神奈川県立がんセンター) 中村京太氏(横浜市立大学) 高橋りょう子助教(医学部附属病院)による講演を中心に進行し、講演毎に活発なグループ討議が行われました。

参加者からは「今後の医学部教育に役立つ内容であった」、「参加型で考える機会となった」、「新しい教育方法が学べた」などの感想が数多く寄せられ、盛況でした。

(医学部附属病院)

第42回 大阪大学中之島講座開催

平成22年9月～12月までの4ヶ月間に計14回に亘り、第42回大阪大学中之島講座を開講しました。

大阪大学中之島講座は、現代の科学・技術の急速な発展、政治・経済の激しい変化や生活様式の変容の中で、大学の研究成果を広く一般市民・学生の皆さんに開放し、生活・職業上の必要な知識の普及と一般教養の向上に資するために企画されたもので、連続と続く伝統的な本学の公開講座です。

今年度は、「いまを読み解く - 医療・都市 - 」を共通テーマとし、「先端医療とその課題」「哲学する都市」という2つのサブテーマ（各7講座）を設定し、本学の14名の教員が講師としてそれぞれ旬のテーマを取り上げ、全講座で延べ800名が受講されました。

参加者は、毎年受講されている方も多くおられ、講師と

の質疑応答では意欲的に質問や意見が出され、多くの講師からも受講者の学習意欲の高さに驚きの声があがるほど盛況な講座となりました。

参加者のアンケートでは、充実した内容だった、資料がわかりやすく、いずれの講義もすばらしい内容だった等の意見が寄せられ、また、今後のテーマについては、「知」の最前線、教養的なもの、専門性の高いもの、歴史関係等いずれも大阪大学ならではの講義を希望する声が寄せられました。

「大阪大学中之島講座」は、来年度創立80周年を期に本学の社会学連携活動の中心的な講座として、その名を「大阪大学21世紀懐徳堂講座」に改称し、さらに充実した内容で広く社会にお届けします。

（21世紀懐徳堂）



宇野公之薬学研究科教授 9 / 17



北村 亘法学研究科准教授 11 / 10



堤 康央薬学研究科教授 10 / 15



加賀有津子工学研究科教授 11 / 17

JUNBA2011サミット会議他への出席について

1月7日(金) サンフランシスコ・エアポート・マリオットホテルを会場として JUNBA (サンフランシスコ・ベイエリア大学間連携ネットワーク) によるサミット会議が開催され、本学から辻毅一郎理事・副学長(国際交流担当)、高杉英一理事・副学長(広報・社会学連携担当)、関 順一郎監事、久保井亮一サンフランシスコ教育研究センター長が出席しました。

今回は、「外から見た日本の大学の国際化—日本の大学は国際化されたのか—」をテーマに日本からはメンバー大学である大阪大学、鹿児島大学、九州大学、東北大学、横浜市立大学、桜美林大学、東京理科大学、福岡工業大学、法政大学の9大学、オブザーバー参加の筑波大学、豊橋技術科学大学、名古屋工業大学、更に傍聴席参加の北見工業大学、京都大学、名古屋大学、弘前大学、福井大学を含め17大学、米国からカリフォルニア州立大学イーストベイ校、サンノゼ州立大学、サンフランシスコ州立大学、カリフォルニア海事大学、スタンフォード大学の5大学、更に文部科学省、日本学術振興会、在サンフランシスコ日本総領事館などから約100名の参加がありました。

午前の部「US- JAPAN University Round Table -Nurturing Global Adaptability of University Students-」では、カリフォルニア州立大学イーストベイ校のモハンマド・H・カヨウミ総長が基調講演の中で、カリフォルニア州立大学が行う教育戦略の具体的な取り組みを紹介し、その後、基調講演を基に日米間で国際的な視野を持った人材を育成するための教育について意見交換を行いました。

午後の部は、「JUNBA Summit -Global Adaptability of Japanese Universities-」と題し、日本の大学間で議論を行いました。始めに、文部科学省の小松親次郎大臣官房審議官が「大学教育の国際化について」と題した基調講演があり、引き続き、参加各大学の具体的な施策の紹介を交えながら、遠隔講義やe-learningを通じた分野横断的な学習成果の向上など米国を中心とした国際化の取組や国際的人材



JUNBA2011 第5回サミット会議参加者(2011.1.7)



大阪大学北米同窓会ベイエリア地区新年会参加者(2011.1.8)

の育成に関して活発な意見交換が行われました。

翌1月8日は、ウエスティン・エアポートホテルにて大阪大学北米同窓会の荒谷仁志会長ご夫妻、要海昌樹様、上木てるみ様、甲川英輔様、Eric C. Sibbitt様をお迎えし、北米同窓会ベイエリア地区新年会を開催し、本学関係者と昼食を交えながら和やかに懇談が行われました。

(国際部国際連携課)

系びす男選り@阪大坂2011

1月10日、豊中キャンパス「阪大坂」を舞台に「系びす男選り@阪大坂2011」を開催しました。5回目を迎える今年、150人もの参加者が脚力と運を兼ね備えた「系びす男」の栄冠を目指して、早朝の阪大坂を駆け上がりました。



300mの急勾配を走り、坂の頂点にあるハッピー3着から『壱番』を引いた人が今年の「系びす男」です。レースの後は、炊き出しや抽選会を実施、池田市「ふくまるくん」や大学教育実践センター「ワニ博士」が会場を盛り上げました。

石橋商店街をはじめとする地域と阪大の交流を願って始まったこのイベントは、石橋商店街有志と経済学研究科松村ゼミによって運営されています。年々参加者を増し、阪大生に限らず地域の方にも「あの坂、毎年走りよらしいな、系びす男やっけ？」と覚えていただいているようです。近年本イベントのみならず石橋商店街と阪大との交流の輪が広がりつつありますが、今後もその流れを盛り上げるべく、新春の恒例イベントとして「系びす男」は走り続ける予定です。西宮神社福男選りだけでなく、「阪大の『系びす男選り』」も覚えてください！

(系びす男選り実行委員会)

附属図書館

「論文の書き方・文献の読み方プチゼミナール」等の開催

附属図書館ではラーニング・コモンズを使った講習会や授業など教員と連携した活動を行って来っていますが、その一環として、総合図書館において12月7日(火)から1月11日(火)まで全4回のプチゼミを実施しました。これは、6月に実施し好評を博した「レポートの書き方講座」の続編で、大学教育実践センターの教員と今回附属図書館職員が講師を担当しました。

ライティングとリーディングを組み合わせた講義内容で、論文企画書の作成と発表を中心に進められ、参加者からは「内容的に理解しやすく、非常に有益であった」とのコメントが寄せられました。

また、附属図書館に配属されているTAによる独自企画のミニ講習会(「プレゼンテーションに挑戦しよう!」)「学外の専門図書館・資料館」などを総合図書館と理工



講義の様子

学図書館のそれぞれのラーニング・コモンズで11月から12月にかけて実施しました。

(附属図書館)

在阪報道各社と大阪大学との新年懇談会開催

1月11日(火)中之島センターにおいて、本学の最新の教育・研究活動について情報発信するとともに、報道関係者との意見交換を目的とした「在阪報道関係の皆様との新年懇談会」を実施しました。

中之島センター9階の会議室において開催された懇談会には、本学からは鷲田清一総長をはじめ、各理事、監事及び総長補佐等が、報道関係からは10社から11名の出席がありました。鷲田総長の挨拶、大学関係者及び報道関係者全員の自己紹介の後、2011年の「大阪大学の取り組み」



鷲田総長による挨拶



懇談会の様子



情報交換を行う高杉理事・副学長



情報交換を行う鷲田総長

について総長、各理事から報告・説明の後、報道各社との意見交換が行われました。

今年は、創立80周年ということもあり、特に80周年記念事業に関して活発に意見交換がなされました。

懇親会では、大学・科学記者クラブ主幹事社である毎日新聞社の発声により乾杯が行われ、懇談会に引き続き本学関係者と報道各社の方々の活発な情報交換が行われ、貴重な機会となりました。

(企画部広報・社会学連携事務室)

大阪大学×大阪ガス 第4回アカデミクッキング 「フードマイレージから考える、地球にやさしい食」開講

専門分野の講義とそれにちなんだ料理実習を通して実践的に教養を深める公開講座「アカデミクッキング」シリーズ。第4回を1月15日(土)、大阪ガスクッキングスクール千里にて、環境と社会を考える親子参加型講座として開講しました。食品の「生産地から食卓までの距離×重さ」で算出するフードマイレージから、日常生活の買い物の中に隠れている「環境負荷」を実感してもらうのが今回の学習の目的です。

受講生はシチューの食材(にんじん、じゃがいも、たまねぎ、鶏肉又はエビ)を持参し、産地、購入店、買い物の交通手段を記入したワークシートを提出。受講生たちがキッチンで料理する間に、講師の工学研究科松村暢彦准教授が親子チームごとのフードマイレージを計算します。

家で料理の手伝いをしたことはあっても、ペッパーミルで胡椒を挽いたり白ワインやローリエでの風味付けは初めてという子どもたちは「シェフになったみたい」と、クッキングスクールの本格レシピに目を輝かせました。できあがったシチューなどを楽しく試食した後は、松村准教授の講義に移ります。

大阪万博が開催され、ファーストフードやコンビニが開

店し、現在のライフスタイルがかたちづくられ始めた1970年代。当時と40年後の現在を比較することで見えてきたのは、便利で豊かで幸せな生活を目指して頑張ってきた日本人が次に考えるべき重要なテーマのひとつに、環境問題があるということ。「正解ではないけれど、間違いじゃないことが世の中にはたくさんあります。例えば環境についても、あれはダメこれもダメと決めつけるとせっかくの取り組みも長続きしません。今日は荷物が重たくなりそうだし、寒いからクルマで買い物へ行こうなど、環境に負荷をかけてしまう選択も、していいんです。けれどそんな時も、考えた上での行動であるとの意識がほしい。私たちの生活はいろんな人を通じて世界とつながっています。誰ひとりとして自分だけでは生きていません。そしてみなさんにはものごとをいろいろな面から考えて、判断し行動できる人になってもらいたいのです」と、講義のシメに小学生受講生に向けて、松村准教授は熱く語りかけました。保護者からは、「子どもと一緒に考える機会ができてよかった」「実際に作って食べるという行動と合わさると、考え方も身につけやすいと思った」などの感想が寄せられました。

(21世紀懐徳堂)



第4回

大阪大学・京都大学・神戸大学 連携シンポジウム —21世紀を“みず”と暮らす—を開催しました。

1月21日(木)『21世紀を“みず”と暮らす』をメインテーマとして、三大学連携シンポジウムを開催しました。



驚田総長によるあいさつ

当日は大阪大学中之島センターの佐治敬三ホールを満席にする約200名のご参加をいただきました。

冒頭では、驚田総長が、「“みず”とくらは、切り離せない。ことに、この関西の地において、“みず”は私たちの生活のなかにある。」とあいさつがありました。

その後、京都大学名誉教授で前滋賀県立琵琶湖博物館長の川



川那部氏による講演



総合討論の様子

那部浩哉氏が基調講演を行い、「“みず”と私たちの暮らしを考える場合には、千年、万年の視点で考えるべきである」と、軽快なテンポでお話いただきました。

引き続き行われた情報提供セッションでは、本学工学研究科の池教授を司会者として、6名の識者が“みず”と私たちの生活とのかかわりについてお話がありました。

工学研究科の小浦准教授からは、“みず”と“まち”の共生を意図した景観作りに関するお話もありました。最後に行われた総合討論では、“みず”に関する議論は、国際的な視点からも地域的な視点も重要であり、長期的な目を持って考えていかなければならない。と認識を新たにしました。

(企画部広報・社学連携事務室)

学生支援ステーション 「フロントスタッフミーティング」を開催

学生支援ステーションでは、1月26日(水)に第2回「フロントスタッフミーティング及び講演会」をコンベンションセンターにおいて開催しました。

このミーティングは、障害を有する学生への対応や進路に関する相談等に挙げられる学生支援の多様化、複数の学部にもまたがるトラブル事案が発生している現状を鑑み、保健センター学生相談室の協力を得ながら、各学部/研究科等における相談室等の現場レベルで対応にあたる教職員(フロントスタッフ)が相互に情報を共有することで、学生生活上の問題の予防や、問題発生時の対応を迅速化することを目的としています。

各学部/研究科等より、多くのフロントスタッフの皆さんに参加していただき、第2回目には「大阪大学のメンタルヘルス」「大阪大学におけるメンタルヘルスの現状と課題 - 不登校事例を中心に - 」と題した講演会(講師:保健センター 井上洋一教授、石金直美准教授)を併せて開催し、大変有意義なものとなりました。



講演会の様子

今後も定期的にフロントスタッフミーティングを開催し、全学的・横断的な連携と情報等の共有を進めていく予定です。

(学生支援ステーション/学生部キャリア支援課)

「研究支援員制度」利用者、研究支援員インタビュー

大阪大学は、平成19年11月より「研究支援員制度」を開始しました。この制度は、出産・育児・介護等で研究時間が確保できにくくなっている研究者の研究面での支援を行うため、大学院修了者・大学院生、学部卒業生・学部生を「支援研究者」や「研究補助員」として採用・配置するものです。本制度は、平成22年度から男性の研究者も利用できるようになっています。

また本制度は、支援する大学院修了者・大学院生、学部卒業生・学部生に対して、ロールモデルと接することにより、キャリア形成を促すこともねらいとしています。

今回は、本制度の利用者と研究支援員として、医学系研究科の浦聖恵准教授と、平尾晶子支援研究者にお話を伺いました。

（インタビューー）

研究支援員制度を利用していただき、いかがでしょうか。

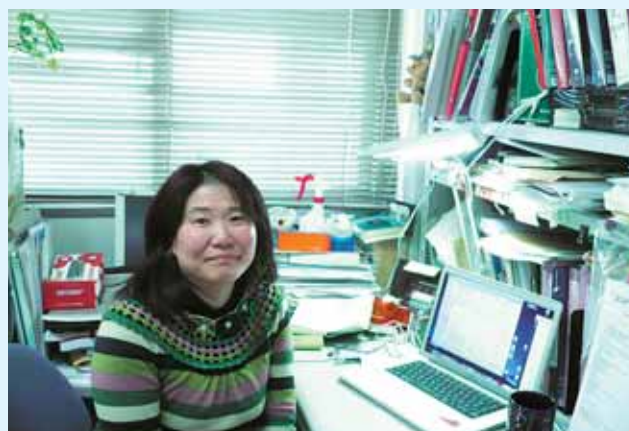
（浦准教授）

支援研究者の平尾さんには、必要な時に、状況の変更にも対応して支援をしていただいて、大変助けになっています。

昨年は、子育てと両親の介護、看病の両方を一人で行わなければならませんでした。特に、子どもは大きくなるにつれて手がかからなくなりますが、介護や看病は逆だったので、精神的に大変厳しいものがありました。自分にとって一番苦しかった時期でしたが、研究支援員制度のおかげで乗り切ることができたと思います。

平尾さんには仕事面と精神面の両方でたいへん助けられました。平尾さんからの支援によって、心に余裕が少しでもできたことで、仕事の面で成長することができた実感しています。

研究面の成果としては、科学研究費補助金（新学術領域研究）を獲得できましたが、この科研費をとるための準備やヒアリングの際にも、平尾支援研究者の協力をいただき



浦准教授

ました。また科研費以外の日々の研究においても、育児や介護等でやりきれない実験のサポートをしてもらいました。これらの研究成果は、国内外の学会において、私たち2人を含めた名前で発表してきています。

次年度以降は、支援を必要としている他の研究者の方々にバトンタッチをしたいと思います。支援が必要な人はもっといると思うので、この研究支援員制度がさらに拡充されると良いと思います。

（平尾支援研究者）

支援研究者ということではありますが、一方的に浦先生の研究支援をしたという感じではなく、お互いに専門が少し異なるので、共同でいろいろな研究の仕事をを行う中でお互いに学べたもの、得たものがありました。それらのことを通じて、浦先生に対する研究支援にもなっていたということではないかと思っています。

（インタビューー）

浦先生にとって最も大変な時期に研究支援を行うことができ、研究支援員制度が大変お役に立っていることが分かりました。本日は大変ありがとうございました。

総長への表敬訪問

ニコライ・ミハイロビッチ・クロパチェフ サンクトペテルブルク国立大学学長大阪大学ご訪問記念講演会の開催について

11月20日(土)、外務省のオビニオンリーダー招待事業により来日中のニコライ・ミハイロビッチ・クロパチェフ サンクトペテルブルク国立大学学長が大阪大学を訪問され、千里阪急ホテルの樹林の間を会場に記念講演会が開催されました。

「ロシアの法制度改革と法治国家の建設」と題した講演会には、鷲田清一総長、辻穀一郎理事・副学長、高杉英一理事・副学長、土井健史理事・副学長はじめ学内関係者が多数出席し、講演終了後には出席者との間で活発な質疑応答が行われました。

講演会終了後は、同ホテル内で場所を移し懇談会が開かれ、鷲田総長とクロパチェフ学長との間で、今後の両大学との交流等について熱心に意見交換がなされました。懇談会には、同行のカテリーナ・ヴィクトロヴナ・ポゴソヴァ学長補佐、川端一郎サンクトペテルブルク日本国総領事と辻理事・副学長、高杉理事・副学長、竹中浩法学研究科教授、生田美智子言語文化研究科教授、亀岡雄国際部長、江藤靖弘国際交流課長が同席しました。

またクロパチェフ学長は、大阪大学未来医療センターおよび先端科学イノベーションセンターを視察され、説明にあたった各センター教員からの説明に強い関心を示されていました。



懇談会終了後、千里阪急ホテルにて
前列左：鷲田清一総長
右：ニコライ・ミハイロビッチ・クロパチェフ
サンクトペテルブルク国立大学学長

中国駐大阪総領事館副総領事の表敬訪問について

11月24日(水)中国駐大阪総領事館より孔多孜・玉素甫(コンドズ・ユスフ)副総領事、劉占山(リュウセンザン)教育室長・領事、張楓(チヨウフウ)教育室・領事が、辻穀一郎理事・副学長を表敬訪問されました。本学からは亀岡雄国際部長、石野隆志学生交流推進課長らが同席し、中国と日本における留学状況などについての意見交換がなされ、両国間の学生交流の促進について話し合われました。



左：中国駐大阪総領事館 孔多孜・玉素甫副総領事
右：記念品を受け取る辻穀一郎理事・副学長

カザフスタン アルファラビ・カザフ民族大学教職員の表敬訪問について

11月30日(火)本学の部局間協定校でもあるカザフスタン、アルファラビ・カザフ民族大学の Gulnar Balakayeva 同学技術部長をはじめとする5名の教職員と、筑波大学中央アジア事務所・副所長、小野正樹准教授が、辻穀一郎理事・副学長を表敬訪問されました。本学からは山口彰工学研究科教授、中嶋善輝世界言語研究センター講師が同席し、留学生の派遣・受入れについての意見交換が行われました。また、懇談に先立ち、理工学図書館、サポートオフィス、国際教育交流センターの概要説明及び見学が行われ、カザフスタンからの留学生が近況を報告する場面も見受けられました。



国際教育交流センターでの懇談終了後、記念撮影

スウェーデン若手研究者使節団の表敬訪問・施設見学について

12月9日(木)スウェーデン王国より Prof.Gunilla Jönson (元ルント大学学長) をリーダーとする若手研究者使節団 20 名とスウェーデン大使館員 3 名が、西尾章治郎理事・副学長を表敬訪問されました。懇談後は 2 グループに分かれ、IFReC、情報科学研究科およびフォトンクス先端融合研究拠点を見学し、各部局の教員が概要説明を行いました。また研究室見学の際には大学院生や若手研究員との活発な意見交換が行われました。



冒頭で歓迎の挨拶をする西尾章治郎理事・副学長

駐日カナダ大使の表敬訪問について

12月16日(木)在日カナダ大使館 Jonathan T. Fried 大使と在名古屋カナダ領事館 Allan Edwards 領事兼通商代表が、辻穀一郎理事・副学長を表敬訪問されました。本学からは花崎喜代治産学連携推進本部教授、妹尾八郎同教授、亀岡雄国際部長、江藤靖弘国際交流課長が同席し、カナダの大学や研究機関等を紹介頂いた後、今後の共同研究の可能性について意見交換がなされました。



左：記念品を受け取る在日カナダ大使館
Jonathan T. Fried 大使
右：辻穀一郎理事・副学長

長岡武志君 IWIN2010 国際学会で「IWIN210 BEST PAPER AWARD」受賞

情報科学研究科コンピュータサイエンス専攻博士後期課程3年の長岡武志君（ソフトウェア設計学講座）が、9月に Edinburgh で開催された国際学会 International Workshop on Informatics (IWIN) 2010 で IWIN2010 BEST PAPER AWARD を受賞しました（共著者：伊藤明彦、田中俊彰、岡野浩三、楠本真二）。この賞は30件の研究発表の中でもっとも優れた発表論文に授与されたものです。

受賞対象となった論文は“Reachability Analysis of Probabilistic Real-Time Systems Based on CEGAR for Timed Automata”です。

この研究では、情報システムの高信頼設計技術の一つである「モデル検査」という技術の省コスト化を目的としています。特に、ネットワークシステムのようにランダムな振る舞いを持つ情報システムが、与えられた実時間的な要求を満たしているかどうかを検査する技術を対象としています。

一般的にこのような高度な検査では実行時間やメモリ消費量などにおいて多くの計算量を必要としますが、この研



究ではそのような計算コストを適切かつ自動的に削減することに成功しています。この研究の理論的側面と実システムへの応用の可能性の高さが評価されたものと考えられます。

（情報科学研究科）

吉元俊輔君、黒田嘉宏助教、井村誠孝准教授、大城理教授、MEIセンター（現・山梨大学）鍵山善之特任助教「生体医工学シンポジウム ベストリサーチアワード」受賞

基礎工学研究科 機能創成専攻 生体工学領域の博士前期課程2年（現・後期課程1年）吉元俊輔君、黒田嘉宏助教、井村誠孝准教授、大城理教授、MEIセンター（現・山梨大学大学院医学工学総合研究部）鍵山善之特任助教が9月10日（金）に生体医工学シンポジウム ベストリサーチアワードを受賞しました。賞は発表に対するものではなく研究に対して授与されたものであり、「論文誌 生体医工学」に掲載される予定の原著論文は、その評価に用いられました。受賞の対象となった「空間透明型電気触覚ディスプレイ」は、神経の解剖学的特徴を利用し、電気刺激位置と異なる指腹部に触覚を発生させる機器であり、把持を阻害しない道具操作支援、特に手術操作支援への応用が期待されます。



（基礎工学研究科・基礎工学部）

和仁健太郎准教授「第43回安達峰一郎記念賞」受賞

国際公共政策研究科の和仁健太郎准教授が、第43回安達峰一郎記念賞を受賞しました。この賞は、かつて外交官として、また、常設国際司法裁判所所長として活躍した安達峰一郎博士の偉業を後世に伝えとともに、国際法研究を奨励することを目的として、毎年、国際法に関する優れた研究業績に対して授与されるものです。

受賞対象となった研究業績は、『伝統的中立制度の法的性格——戦争に巻き込まれない権利とその条件——』（東京大学出版会、2010年）です。国際法上の中立制度については、従来、中立国が中立義務という平時には存在しない義務を負わされるという意味で、中立国にとって一方的に不利な制度だったと考えられてきました。これに対して本書は、詳細な歴史的研究に基づき、中立制度は、中立国が交戦国によって戦争に巻き込まれないことを法的に保障されたという意味で、むしろ中立国の利益を保護する制度だったことを明らかにしました。本書で行われたのは中立制度の歴史的研究ですが、現代における中立の問題の研究に



対しても重要な示唆を与えるものと考えられています。

なお、授賞式は11月5日(金)に、東京・九段のホテルグランドパレスで行われました。

(国際公共政策研究科)

澤井元准教授、花垣和則准教授 「平成22年度科学研究費補助金第1段審査における審査委員表彰」

医学系研究科の澤井元准教授と理学研究科の花垣和則准教授が、独立行政法人日本学術振興会より、平成22年度科学研究費補助金第1段審査における審査委員表彰を受けられました。

科学研究費補助金は、人文・社会科学から自然科学まですべての分野にわたり、基礎から応用までのあらゆる「学術研究」を格段に発展させることを目標とする「競争的資金」であり、ピア・レビュー（専門分野の近い複数の研究者による審査）により、審査されています。



左から、花垣准教授、澤井准教授、鷲田総長

科学研究費補助金制度を適正・公平に運営していくにあたって、審査委員は、ピア・レビュー審査の信頼性を損なうことがないように科学的良心に従って、公平・公正に審査を行うことが求められます。

今回は、約5,000名の第1段審査（書面審査）委員の中から、模範となる審査意見を付した審査委員39名が選考され、本学からは澤井元准教授と花垣和則准教授が選ばれました。

表彰は、総長より、日本学術振興会からの表彰状及び記念品が手渡されました。



(研究推進部研究推進課)

木ノ下智恵子特任准教授「平成22年度神戸市文化奨励賞」受賞

コミュニケーションデザイン・センター，アート部門の木ノ下智恵子特任准教授が，平成22年度神戸市文化奨励賞を受賞しました。神戸市文化奨励賞は，学術・芸術など（社会部門・体育部門を含む。）の分野において，新進気鋭で，その活動が特に将来において期待される個人および団体に授与されるものです。今回の授賞は，若手芸術家育成事業「神戸アートアニュアル1996-2005」，神戸ビエンナーレ関連企画「アートツーリズム・ワークショップ／神戸観考」，水都大阪2009「ヤノベケンジ・プロジェクト」，日本現代美術の定点観測展「六本木クロッシング2010／芸術は可能か？」等，木ノ下特任准教授の長年にわたる教育研究，社会学連携活動が評価されたものです。11月16日（火）には，神戸市相楽園会館において贈呈式が行われました。



木ノ下特任准教授（右）

（コミュニケーションデザイン・センター）

小室一成教授「第47回(2010年度)ベルツ賞」受賞

医学系研究科循環器内科学の小室一成教授のグループが，第47回ベルツ賞（1等賞）を受賞しました。ベルツ賞は，日本とドイツの間にある歴史的な医学領域での交流関係を回顧し，さらに深めていく目的で，ペーリンガー・インゲルハイム社が1964年に設立した賞で，日本の近代医学の父であるエルフィン・フォン・ベルツ博士の名前を冠した，大変伝統ある医学賞です。毎年，時宜に応じたテーマで論文を募り，優れた論文に授与されます。本年度のテーマは，「心不全」であり，小室教授グループの論文タイトルは，「心不全の病態生理の解明と新しい治療法の開発」でした。

「心不全」はあらゆる心臓疾患の終末像であり，その患者数の多さと不良な予後から，循環器疾患の中でも最も重要な疾患と位置付けられています。小室教授のグループは，今までに数多くの世界的な業績をあげていますが，最近心不全に関する新しい発症機序を提唱し，それに基づく臨床試験を展開しています。また再生治療につながる新しい心



筋細胞分化誘導因子を発見しており，世界的にも注目されています。贈呈式は11月19日（金）にドイツ大使出席のもと，大使公邸で執り行われました。

（医学系研究科・医学部）

医学部附属病院「第5回医療の質・安全学会学術集会 ベストプラクティス特別賞」受賞

11月27日(土)～28日(日)に幕張メッセ(千葉県)で開催された、第5回医療の質・安全学会学術集会において、医学部附属病院で実施している、患者さんと医療者とのパートナーシップを目指す「いろはうた」の取り組みが、ベストプラクティス特別賞を受賞しました。

中央クオリティマネジメント部では、医療および医療安全への積極的な患者参加を支援するため、7つのメッセージを句とイラストで表現し、デザインしたオリジナルツールである「いろはうた」ファイルを開発しました。平成22年6月1日から、このファイルを全ての入院患者さんに配付し、看護師が一人ひとりへの説明を実施しています。また、全職員が専用の「いろはうた」バッジを着用するなど、病院全体でパートナーシップを推進しています。

今回の賞は、医療安全に関する活動報告の64演題の中から、10名の選考委員【選考委員長：永井良三(東京大学医学部教授)】により選出された、新規性、実用性、有



効性に優れる4演題に授与されました。当院の取り組みは、患者さんからいただいた多くの前向きなご意見や、「いろはうた」導入による患者さんと医療者とのパートナーシップ推進の成果が高く評価されました。

(医学部附属病院)

審良静男教授「第15回慶應医学賞(The Keio Medical Science Prize)」受賞

免疫学フロンティア研究センター(IFReC)の拠点長、審良静男教授が、第15回慶應医学賞(The Keio Medical Science Prize)を受賞しました。表彰式は11月29日(月)、東京都の慶應義塾大学信濃町キャンパスの北里講堂にて行われました。

慶應医学賞は「医学・生命科学の領域において顕著かつ創造的な業績を挙げ、今後の活躍が期待される研究者」を対象に受賞者を決定しています。過去には慶應医学賞受賞者からノーベル賞受賞者を5名輩出していることから、その権威が伺えます。

今回、審良教授はストラスブール大学教授でフランス科学アカデミー総裁を務めたジュール・ホフマン博士と同時

に受賞しました。ともに自然免疫学の進歩に重要な貢献をした免疫学の研究者です。

審良教授の受賞理由は「自然免疫システムにおける微生物認識と免疫応答機構の解明」です。審良教授は、免疫細胞に存在するトル様受容体(TLR)ファミリーの機能解析を通じて、自然免疫システムが病原体成分をいかにして認識するのかを明らかにしてきたことが、高く評価されました。

授賞式では、鈴木寛文部科学副大臣、駐日フランス大使フィリップ・フォール氏からの祝辞が述べられました。その後には審良教授とホフマン博士の記念講演会があり、質疑応答が行われました。



審良教授による記念講演



清家慶應義塾長からの祝辞

(免疫学フロンティア研究センター)

隅田剣生産学連携准教授が「イノベーションコーディネータ賞若手賞」を受賞

産学連携推進本部の隅田剣生（すみた けんせい）産学連携准教授が、独立行政法人科学技術振興機構（JST）が実施する「第2回イノベーションコーディネータ表彰」の「イノベーションコーディネータ賞・若手賞」を受賞しました。

この表彰は、全国各地のさまざまな機関で産学官連携活動に従事しているコーディネータの中で、優れた成果を挙げたり、ほかの模範となる取り組みを行っている人材に対して授与されるもので、このうち「イノベーションコーディネータ賞・若手賞」は優れたコーディネート活動を行っており、今後の活躍が大いに期待される45歳未満の若手のコーディネータに対して贈られるものです。

今回の受賞は「企業化シーズを発掘するベンチャーサポートプログラムを企画・開催して数多くの企業化を実現し、阪大発ベンチャーの設立に大きく貢献しただけでなく、コ



後列左から2人目：隅田准教授

ーディネート人材の発掘・育成も主導的に行っている」ことが評価されたもので、今後の一層の活躍が期待されます。
（研究推進部研究推進課）

土山明教授「はやぶさ」功労者に対する宇宙開発担当大臣・文部科学大臣感謝状を授与

理学研究科宇宙地球科学専攻の土山 明教授が、「はやぶさ」功労者に対する宇宙開発担当大臣感謝状及び文部科学大臣感謝状を授与されました。

これらの感謝状は、宇宙航空研究機構（JAXA）の小惑星探査計画である「はやぶさ計画」に携わり、功労のあった、はやぶさプロジェクトチーム（JAXA）、はやぶさプロジェクトサポートチーム（企業代表および大学代表）に対して、授与されたものです。

土山教授は、はやぶさプロジェクトサポートチーム（大学代表）として、初期分析を担当しています。はやぶさ探査機により小惑星イトカワから採取されたサンプル粒子の初期分析を、そのチームリーダーとして分析計画を総括するとともに、1月21日（金）からは、CTなどX線イメージング手法を用いた分析を行いました。探査機が打ち上げられた平成15年5月以前から、長期に渡って初期分析のための準備が行われてきましたが、人類が初めて直接手にした、この小惑星サンプルの今後の分析成果が期待されています。



東島理学研究科長（左） 土山教授（右）

なお、この授与式は12月2日（木）に内閣府庁舎において、海江田宇宙開発担当大臣および高木文部科学大臣の列席のもとに行われました。

（理学研究科・理学部）

大野朋重君GIW2010国際会議で「The BEST POSTER AWARD of GIW2010」受賞

情報科学研究科バイオ情報工学専攻博士前期課程2年の大野朋重君が、12月に中国・杭州（Hangzhou）で開催された国際会議「The 21st International Conference on Genome Informatics（GIW2010）」において口頭発表とポスター発表を行い、「The BEST POSTER AWARD of GIW2010」を受賞しました。この賞は本国際会議で最も優れたポスター発表2件に授与されるものです。授賞式は12月18日（土）に本国際会議のアワードセレモニーで行われ、賞状と賞金1,000RMB（人民元）が授与されました。

受賞対象となった発表は「An Improved RNA-Seq Analysis Method for Isoform Prediction by Iterative Mapping」です。DNAやRNAの塩基配列を解読するためのシーケンシング技術は日進月歩でハイスループット化しており、現在では一回の実験で数百億から数千億の塩基を読むことが出来ます。そしてこの技術を利用して細胞の中のRNA配列を解読し、遺伝子発現量の定量・新規転写配列の発見等を試みる手法をRNA-Seqと呼びますが、そのデータ量や真核生物の遺伝子発現機構の複雑さゆえに高度な情報処理技術が必要になります。本研究は、確率モデルや反復法



大野君（左）と指導教員の松田教授

を利用した新たな情報処理戦略の構築によって発現量の定量性と新規転写産物の検出精度の向上を達成したもので、この成果は今後様々な解析に応用される可能性があります。

（情報科学研究科）

太田岳史君「日本NIアプリケーションコンテスト学生部門最優秀賞」受賞

理学研究科物理学専攻（核物理研究センター所属）の博士後期課程3年の太田岳史君が「日本NIアプリケーションコンテスト」学生部門最優秀賞を受賞しました。

このコンテストはナショナル・インストルメンツ（NI）製のソフトウェア・ハードウェアを使用したアプリケーションを、日本全国のユーザより募り、技術、コスト、革新性等の面から審査するコンテストです。アプリケーション・コンテストの歴史は平成10年に遡り、学生部門は平成15年から設けられ、独創性に溢れる研究開発成果に対して与えられるものです。

太田君は、核磁気共鳴（Nuclear Magnetic Resonance: NMR）信号を解析するために、

1. アナログ信号を高速デジタル変換する最新技術、
2. ノイズを画期的に減少させ核磁気共鳴に特有な信号のみをピックアップするフーリエ変換技術、

を組み合わせ、高速パーソナルコンピュータを用いてNMR信号検出に成功しました。従来NMR回路システムに用いられていた高価なロックインアンプが不要となる仮想NMR回路システムの構築に成功したといえます。今回の受賞研究課題は「PXIを用いたポータブルNMR測定シ

ステム：LabVIEWで仮想化するロックインアンプ」です。

この研究ではNMRシステム構築を安価にすると共に、回路システム全体的大幅なサイズ減少を達成しました。

研究成果は、将来、広くNMR回路システムに応用され、核物理研究

センターで開発中の偏極陽子・重陽子標的の偏極測定に大きく貢献します。また、偏極光ハドロン反応を用いて、クォークから構成されている核子構造を研究する切り札となる「スピン偏極完全実験」実施への技術基盤を与えました。

（理学研究科・理学部、核物理研究センター）



Oliver Belargaさんが「UNDP-Olympus-AFP Foundation Photo Contest」で入賞

人間科学研究科グローバル人間学専攻人間開発学講座国際協力学研究分野 Oliver Belarga さん（博士後期課程1年）が、国連の開発・援助機関である国連開発計画（UNDP）が開催した写真コンテスト（UNDP-Olympus-AFP Foundation Photo Contest）で入賞しました。

UNDP は2015年までに達成すべき目標としてミレニアム開発目標（MDGs）を発表し、貧困と飢餓の根絶、初等教育の普遍的実施など八つの目標を設定しています。もちろん、こうした目標の達成は、国連加盟国政府の努力によるところ大きいのですが、他方で市井の人々にも、ミレニアム開発目標を理解し、開発対象国の現状を知ってもらうために、UNDP はオリンパスと共同で、ミレニアム開発目標にちなんだ写真コンテストを開催しています。Oliver さんは人間開発学講座国際協力学研究分野で、フィリピンの障害を持つ子供たちに対する教育システムを研究しており、入賞作品もフィリピンでのフィールドワーク中に撮影した赤ちゃんの写真です。「Essential Care」と題したオリバーさんの写真は、第4開発目標「乳幼児死亡率の減少」部門で入賞しました。将来、フィリピンの農村に、障害を持つ子供たちのための学校を建設したいというオリバーさん。受賞が今後の研究のさらなる励みになるでしょう。



（人間科学研究科・人間科学部）

日本学生支援機構優秀学生顕彰事業表彰式実施

1月19日（水）に日本学生支援機構平成22年度「優秀学生顕彰」の受賞報告が総長室において実施されました。

この優秀学生顕彰は、学術、文化芸術、スポーツ活動、社会貢献活動の4分野において優れた業績を挙げた学生を顕彰し、これら活動の一層の促進を奨励・援助し、もって21世紀を担う前途有望な人材の育成に資することを目的として日本学生支援機構により平成17年度に創設されたものです。

本学からは、学術分野で医学部6年生の平塚 徹さんが優秀賞を受賞しました。

平塚さんの受賞は、漢方薬の抑肝散が小胞体ストレスを抑制することにより、神経細胞保護作用を持つことを証明、さらにそれに含まれる有効成分を同定し、国内学会発表、国際学会発表及び国際学術誌に掲載されたことが評価されたものです。

当日は、鷲田清一総長、小泉潤二理事・副学長、平野俊夫医学部長、大垣一成学生生活委員会委員長の列席のもと、平塚さんから、受賞報告が行われ、引き続き、鷲田総長が



受賞者を囲んで、左から大垣委員長、平野医学部長、平塚さん、鷲田総長、小泉理事・副学長

ら、基礎医学研究の重要さ及び今後の一層の精進を祈念するなどのお祝いの言葉が述べられた後、終始なごやかな雰囲気の中に閉会となりました。

（学生部学生支援課）

岸本忠三元総長、平野俊夫医学系研究科長・医学部長が「日本国際賞 (Japan Prize)」を受賞

1月25日(火)に公益財団法人国際科学技術財団より、2011年(第27回)日本国際賞(Japan Prize)が本学の岸本忠三生命機能研究科寄附講座教授(大阪大学元総長、名誉教授)と平野俊夫教授(医学系研究科長・医学部長)に贈られることが発表されました。

今回の受賞は、「インターロイキン6」の発見から疾患治療への応用が認められたことによるものです。

なお授賞式典は4月20日(水)に東京で開催され、賞状と賞牌が贈られます。



岸本元総長



平野研究科長



(医学系研究科・医学部、生命機能研究科)

新教授紹介

松 村 泰 志 (まつむら やすし)

大学院医学系研究科



【略歴】

- 昭60. 3 大阪大学医学部医学科卒業
- 60. 4 大阪大学医学部（内科学第一教室）において研究に従事
- 60. 6 大阪大学医学部附属病院において臨床補助の研修に従事
- 60. 7 医員（研修医）（大阪大学医学部附属病院）
- 61. 7 大阪警察病院循環器内科医員（～平1.3）
- 平 4. 9 大阪大学大学院医学系研究科博士課程退学
- 4.10 大阪大学助手医学部
- 6. 2 医学博士（大阪大学）
- 11. 4 大阪大学助手医学部附属病院
- 11. 5 大阪大学助教授医学部附属病院（医療情報部副部長）
- 19. 4 大阪大学准教授医学部附属病院（医療情報部副部長）
- 22.12 大阪大学教授大学院医学系研究科

所 属：大学院医学系研究科情報統合医学講座
（医療情報学）

専門分野：医療情報学

今 里 聡 (いまざと さとし)

大学院歯学研究科



【略歴】

- 昭61. 3 大阪大学歯学部歯学科卒業
- 61. 4 大阪大学歯学部研究生
- 63. 4 大阪大学歯学部附属病院医員
- 平 3.12 大阪大学助手歯学部
- 4.11 博士（歯学）（大阪大学）
- 5. 4 英国ニューカッスル大学歯学部客員研究員（～平6.4）
- 11.11 大阪大学助教授歯学部
- 12. 4 大阪大学助教授大学院歯学研究科
- 19. 4 大阪大学准教授大学院歯学研究科
- 23. 1 大阪大学教授大学院歯学研究科

所 属：大学院歯学研究科顎口腔機能再建学講座
（歯科理工学教室）

専門分野：歯科材料学，生体材料学

西 山 憲 和 (にしやま のりかず)

大学院基礎工学研究科



【略歴】

- 平 4. 3 大阪大学基礎工学部卒業
- 6. 3 大阪大学大学院基礎工学研究科博士前期課程修了
- 6. 4 日本学術振興会特別研究員
- 7.12 大阪大学大学院基礎工学研究科博士後期課程退学
- 8. 1 大阪大学助手基礎工学部
- 9. 4 大阪大学助手大学院基礎工学研究科
- 9. 6 工学博士（大阪大学）
- 15. 4 大阪大学助教授大学院基礎工学研究科
- 19. 4 大阪大学准教授大学院基礎工学研究科
- 23. 1 大阪大学教授大学院基礎工学研究科

所 属：大学院基礎工学研究科物質創成専攻化学工学領域反応化学工学講座

専門分野：反応工学 膜分離工学 多孔質材料

新教授紹介

石 田 潤一郎 (いしだ じゅんいちろう) 社会経済研究所



【略歴】

- 平 6. 5 Michigan State University 社会科学部卒業
- 10. 5 University of Wisconsin-Madison 経済学研究科修士修了
- 10. 5 経済学修士 (University of Wisconsin-Madison)
- 12. 5 University of Wisconsin-Madison 経済学研究科博士修了
- 12. 5 Ph. D. (経済学) (University of Wisconsin-Madison)
- 12. 4 信州大学講師経済学部
- 15. 4 信州大学助教授経済学部
- 17. 3 大阪大学助教授大学院国際公共政策研究科
- 19. 4 大阪大学准教授大学院国際公共政策研究科
- 21. 4 大阪大学准教授社会経済研究所
- 22.12 大阪大学教授社会経済研究所

所 属：社会経済研究所政策研究部門
専門分野：応用ミクロ経済学

中 井 光 男 (なかい みつお) レーザーエネルギー学研究センター



【略歴】

- 昭55. 3 大阪大学工学部電気工学科卒業
- 57. 3 大阪大学大学院工学研究科博士前期課程修了
- 60. 3 大阪大学大学院工学研究科博士後期課程修了(工学博士)
- 60. 4 (社)レーザー学会レーザー技術振興センター研究員
- 62. 7 (財)レーザー技術総合研究所研究員
- 平 1. 4 大阪大学助手レーザー核融合研究センター
- 4.10 英国Rutherford Appleton研究所British Council Fellow (平5.9まで)
- 15. 9 大阪大学助教授レーザー核融合研究センター
- 16. 4 大阪大学助教授レーザーエネルギー学研究センター
- 19. 4 大阪大学准教授レーザーエネルギー学研究センター
- 22.12 大阪大学教授レーザーエネルギー学研究センター

所 属：レーザーエネルギー学研究センター
レーザー核融合学研究部門
専門分野：プラズマ物理, 放射線計測, 核融合燃料技術

藤澤和男名誉教授(基礎工学部)逝去



本学名誉教授藤澤和男先生は、平成 22 年 12 月 4 日にご逝去されました。享年 89 歳でした。

先生は昭和 18 年大阪帝国大学工学部通信工学科を卒業され、同大学院特別研究生を経て、昭和 23 年 12 月大阪大学工学部助教授になられました。昭和 29 年神戸大学工学部電気工学科に一時赴任されたのち、昭和 37 年 4 月創設まもない大阪大学基礎工学部教授として赴任され、昭和 60 年 3 月大阪大学を定年退官され、大阪大学名誉教授となられました。定年後は、平成 5 年 3 月まで大阪産業大学教授になられました。その後数年間大阪大学基礎工学部電気工学科に通われて精力的な研究を続けられました。

先生はマイクロ波からサブミリ波領域にわたる電磁波理論と電磁波デバイスの技術分野で先駆的な研究をおこなわれ、数々の業績を挙げてこられ、「ラダートロン」と命名された新型高出力ミリ波電子管を発明されました。この電子管はラダー（はしご）構造の変調間隙を有する一空胴多間隙クライストロンで、ミリ波帯で連続出力 10 ワットを出し、当時としては画期的な性能を示し、沖電気工業株式会社と三菱電機株式会社において製品化され、アメリカ合

衆国などに輸出され、世界的な反響を呼びました。先生の発明・開発に対して「昭和 35 年度朝日科学奨励金」、「昭和 36 年度（第 2 回）東洋レーヨン科学技術研究助成金」および「昭和 40 年度電気通信学会論文賞」を受賞されました。

また、半導体内の波動伝播、電磁波理論、赤外線レーザーならびに「昭和 49 年度三菱財団学術研究助成金」を受賞されたピコ秒電子ビームパルスを用いる超高速波形観測装置などの研究を推進されました。また、超伝導エレクトロニクス分野の研究では、ジョゼフソン・ハーモニックミキサの動作解析とそれを基にしたミリ波・サブミリ波の超高感度検出に対しては「昭和 58 年度応用物理学会賞」と「昭和 59 年度山田科学振興財団研究助成金」を受賞されました。このように、先生はミリ波から遠赤外域に至る未踏電磁波関連分野で数々の独創的な研究を行なわれ、関連分野の技術進歩に大きな貢献をなされました。一方先生がご執筆された「マイクロ波回路」、「改定マイクロ波回路」（コロナ社）は昭和 35 年初版発行以来今日まで三十数版を重ね、マイクロ波技術者の教育・育成に大きく貢献しており、これらの貢献に対し平成元年に米国電気電子学会（IEEE）よりフェローの称号を受けられました。

そのほか、学外におかれましては電子通信学会評議員・関西支部長、同電子デバイス研究専門委員会委員長、同光・電波部門全国大会実行委員長、レーザー学会評議員、日本学術振興会超伝導エレクトロニクス委員会委員等の要職を歴任され学会の発展に尽くされました。また平成 9 年 4 月 30 日、先生のご研究・教育・行政上の偉大な功績が認められ、勲三等旭日中綬章を授与されました。

先生の多大なご功績を偲び、ここに謹んで哀悼の意を表します。

（基礎工学研究科・基礎工学部）

近畿地区国立大学法人等職員統一採用試験のお知らせ

近畿地区国立大学法人等職員統一採用試験の試験案内を配布しています。

募集職種：事務系職員（事務・図書）、技術系職員

受験資格：昭和57年4月2日以降に生まれた者

受付期間：4月1日（金）～4月8日（金）

第一次試験日：5月15日（日）

試験案内の入手方法など、詳細は下記にお問い合わせください。

近畿地区国立大学法人等職員統一採用試験事務局

HP <http://www.kyoto-u.ac.jp/siken/>

電話 075 - 753 - 2227 ~ 2230

「ANNUAL REPORT OF OSAKA UNIVERSITY-Academic Achievement- 2009-2010」 刊行のお知らせ

本学の優れた研究成果を国内外に発信する英文研究年報「ANNUAL REPORT OF OSAKA UNIVERSITY-Academic Achievement- 2009-2010」を平成23年2月に刊行しました。平成12年の創刊以来、第11巻目の刊行となります。本誌は、全学の研究者からの応募論文のうち、人文・社会系、理学系、工学系、及び生物系の各分野から選ばれた論文100編を掲載し、その中でも特に優れた論文として論文10選をとりあげています。

また、第11巻においては内容・デザインを刷新し、さらに掲載内容を記録したCDも作成いたしました。大阪大学の紹介に是非お役立てください。

今後、各教員の方には冊子を1部ずつ配布する予定ですが、追加を希望される場合は所属部局の事務部または国際部国際連携課国際連携係（内線9572）までお知らせください。

また、大阪大学ホームページにも、今後掲載する予定ですので、そちらも併せてご覧ください。

<http://www.osaka-u.ac.jp/ja/research/report.html>



（国際部国際連携課）

記念講義

平成23年3月31日限りで定年等により退職される教授の記念講義を、日程等が決まったものについてお知らせします。

部局（講座・部門等）	氏 名	日 時・場 所	講 義 題 目
工学研究科 （電気電子情報工学専攻・ 集積エレクトロニクス講座）	谷 口 研 二	平成23年3月10日（木） 16:00～17:30 （銀杏会館3階阪急電鉄・ 三和銀行ホール）	集積回路の研究を振り返って 想うこと

機関リポジトリ（学術情報庫OUKA）のコンテンツ搭載状況

大阪大学の機関リポジトリ（学術情報庫OUKA）は、平成23年1月現在、商業学術雑誌掲載論文や紀要論文、研究報告書、博士論文、本学関連学会論文などの18,000件以上の高水準な研究成果等をインターネットで無料公開し、学術情報のオープンアクセス化に取り組んでいます。今後も、新しい学術コミュニケーションを創生していくこの事業へのご協力をお願いします。



平成23年1月現在のコンテンツ収録数（18,306件）

商業学術雑誌論文	169	Discussion Paper 等	707	本学関連学会論文	5,926
学内紀要論文	7,583	会議発表論文・資料	125	単行書（本）	9
博士論文	2,031	教材	58	データセット	79
報告書等	30	貴重書	435	その他	1,154

連絡先：附属図書館学術情報整備室電子コンテンツ主担当

担当者：前田、土出

E-mail：hdjoho01@library.osaka-u.ac.jp

Tel：06-6850-5071（豊中内線 5071）



INTERVIEW

たけ だ あき ひろ
竹 田 明 敬

財務部吹田調達センター室調達第二係主任

吹田調達センター室で勤務する竹田さんは18年間「合気道」に取り組んでいます。恩師との出会いから、仕事や私生活に生きる合気道の考え方など、興味深いお話を伺いました。

きっかけ

学生時代の体験入部でOBと組んだ際に、何も力を入れていないのに、気づくと自分の体が宙を舞った「不思議な体験」が合気道との出会いとなった。

卒業後も、在学中から指導を受けていた道場において活動を続けた。道場での「恩師との出会い」が現在に至る大きな要素となっているようだ。

合気道について

開祖の植芝盛平翁(1883-1969)が幾多の武術を究めて創始した武道で、主に戦後から盛んになった。相手の力に逆らわず、円や螺旋の動きで自己の氣の流れに相手を和させる技に特徴があり、勝ち負けという概念が存在しないため、試合がないことも大きな特徴といえるだろう。

合気道から得たもの

道場では、開祖の直弟子にあたり書道家でもある阿部醒石師範の指導を受けている。そればかりではなく、師範のかばん持ちや車の運転、自宅の庭掃除の手伝いなど、内弟子のような立場にもあり、そのため師範に直接接する機会が多いので、他の門下生では得られない様々な経験を得ることにより、深く合気道の考えを得ることができている。



合気道の基本的な考え方に『もらった力を返す』というものがある。これは、相手の力を利用して技を返すという意味だけでなく、自分が受け取った知識や経験を、後輩や社会に繋げていくという、普段の生活の中でも取り入れやすい考え方であるという。

また、「古事記」からの引用で合気道のもうひとつの考え方を語ってくれた。「古事記の最初に登場する天之御中主神(あめのみなかぬしのかみ)というのは、これはいわゆる“神様”ではなく、中心の大切さを説かれた“偉大な人間”のことなのです。合気道は円の動きをします。円の中へ、外への動きは中心の考え方が大切になってきます。」これらの教えは、たとえば、竹田さんの普段の職場での会話でも、「今、話の中心はどちらにあるのか」と考えることで、仕事を始め、日常生活でも多に役立っている。

これから

合気道を通じた、これからの目標について聞いてみた。「開祖から、阿部先生、そして自分へ伝えられてきたことを次の世代に伝えていきたいと思います。変わらないこと、変えてはならないことを大切に、伝えることができればと思います。」

また、普段の仕事でも『もらった力を返す』『中心を大切にする』との考え方を大切にしている。「上司から教えてもらった知識等は後輩に伝えていきたいですし、仕事の打合せなどでも、話の『中心』を意識しながら相手の立場や状況を見る姿勢も大事にしていきたいですね。」

サンフランシスコから:「新咸臨丸プロジェクト」発進

大阪大学サンフランシスコ教育研究センター長
久保井 亮 一

2011年、創立80周年の開幕おめでとうございます。

大阪大学創立80周年「原点へ 未来へ」を迎えた今、次の100周年に向かって、この大阪大学から、若手グローバルリーダー育成のための能動的なプロセス・プログラムをスタートすることが期待されています。

日本の優れた先端科学技術力を世界に発信し、持続社会構築へ貢献すると共に、国際的に信頼できる人材・パートナーとして認知され、又グローバルリーダーとして活躍するためには、教養・人格、専門能力、語学力(中でもプレゼンテーション能力)を磨くことに加え、異文化を理解し適切に対応できるグローバル・コミュニケーション能力、デザイン力・構想力を身に付けることが必須です。これは、本学の目指す教養力・国際性・デザイン力の涵養というスローガンに明示されている通りかと思えます。

これを実現するためには、先ず周到に計画された異文化間の関係性構築やコンフリクト解決に役立つ事前学習・実習を準備する必要もあります。その上で、実際の異文化・国際社会の中に飛び込み、異なる環境の中での国際的なメンターによる双方向型講義、異なるメンバーから構成されるグループ内質疑討論、またメンターとのアクティブな対話、議論の発散・収束を繰り返す実践型演習も必要でしょう。その繰り返しの中で、徐々に全く異なる文化・背景を持つ相手との対話のあり方を学び、対話を通して共通性(人間性)を発見し、それを共有する喜びも生まれるのではないのでしょうか。また、ものごとや人間関係・組織を新たに、グローバルな観点から捉え直し、自他が共有できる文化を育成・創造してゆく可能性も大きくなるのではないかと期待されます。

このような観点から、当サンフランシスコ教育研究センターが本学産学連携推進本部と連携して、2010年11月29日(月)~11月30日(火)に、サンフランシスコセンターおよびベイエリアで実施した、「若手グローバル・イノベーション人材育成による未来科学技術の開拓ワークショップ」(SF-WS)第1回新咸臨丸プロジェクトについて、簡単に紹介したいと思います。

本プロジェクトは、80周年記念事業の承認を得て、日米協働グローバル人材育成プログラムとして提案したもので、その趣旨は、大阪大学及び米国ベイエリア地域の大学・企業で活躍する国際的リーダーを講師・メンターとして、実践的グループ型ワークショップを通して、未来科学技術



を開拓し企業化できる次世代国際的リーダーを育成する契機とするものです。また日米間のグローバルなイノベーション人材ネットワークの構築を目指すというものです。

学内各部局長・各GCOE拠点長の先生方にも、学生選抜・派遣等の協力をお願いし、提案・実施に先だっては、センター・産学連携推進本部間で数回の打ち合わせ(TV会議)を行い協議して、運営支援会議の設置協力をいただきました。また、UCバークレー CITRIS・I-House 他、大阪大学北米地区同窓会、ベイエリアの企業にも講師・メンターの依頼やスポンサー協力をお願いしました。

また、渡米前の事前研修プログラムについては、産学連携推進本部での実績に基づき、11月初旬より、4部局・4GCOE等より選抜されたWS参加学生14名を対象として、各種オリエンテーション、英語プレゼン講習、異文化・英語コミュニケーション指導等の事前研修を数回に亘って実施していただきました。

渡米後は2日間で5つの講義を受講し、さらに2つのプレゼンテーションおよびディスカッションの後、グループ単位でプレゼンコンペを行いました。これらを通して、キャリアデザインおよび技術の事業化について考察し、自らの研究テーマと社会的展開を俯瞰する契機となることを期待しています。

渡米後のWS日程の概略は以下の通りです。

27日に学生・先生方のSF歓迎会を行い、28日にセンターにて担当者・ファシリテーターを交えて事前打ち合わせ・懇談会を実施しました。

29 日午前中は、Vikrahm Kashyap 氏（起業家） Scott Mcneil 氏（President, De Novo Group）を講師に迎え、シリコンバレーにおけるビジネスの展開と社会貢献を目的とする起業・キャリアデザイン等について、大変活発な質疑応答を交えながらご講義いただきました。午後は、グループに分かれ、日米学生フォーラムを実施しました。3 名のアドバイザーを迎えて 3 グループでローテーションし、各セッションにて、パワーポイントを使って自己紹介（自らの研究内容等の紹介を含む）、キャリアデザインに関するプレゼンテーション技術の向上を図りました。メンター及びファシリテーター Richard More 氏（客員教授 / Lawrence Livermore National Laboratory）、Seung-Wuk Lee 氏（Assistant Professor / UCB）、Yosuke Kanai 氏（PostDoc / Lawrence Livermore National Laboratory）がそれぞれの発表について改善点、また効果的な自己紹介の方法について指導を行いました。

夜の講義は、本学の最先端研究（浅田稔教授：インテリジェント・ロボティクス）に関するもので、本 WS 参加者のみならず一般にも公開され、場所もサンフランシスコダウンタウンに位置する San Francisco State University Downtown Campus に移して開催されました。（大阪市シカゴ事務所・大阪大学北米地区同窓会・大阪市・サンフランシスコ市姉妹都市委員会・咸臨丸 150 周年委員会・北カリフォルニア商工会議所・北カリフォルニア日米協会等共催。）内容としては、人間型ロボットであるヒューマノイドの新たな設計・製作・作動と認知科学や脳科学の手法を用いた構成モデルの検証による科学と技術の融合によって、人間



知能の新たな理解と構成を実現するという、共創知能システムを分かり易くご講義いただいたものです。講義の合間、終わりに活発な質問が投げかけられ、終了後も一般聴衆 / スポンサー / 支援者らとの交流が続きました。

30 日午前はバスで Palo Alto に向かい、シリコンバレーで基盤型研究開発からオープンイノベーションへ転換した PARC (Palo Alto Research Center)、先端情報産業 Google, Inc. を訪問し、双方向型講義・質疑応答が行われました。前者では Aki Ohashi 氏（Director of Business Development / PARC）による interactive な講義の後、同社を見学しました。また、後者においては、若手技術者による仕事紹介・講義、職場見学を行いました。いずれにおいても非常に活発な質疑がありました。



30 日午後はサンフランシスコセンターに戻り、Richard More 氏、Yosuke Kanai 氏、Takahide Inoue 氏（Advisor / CITRIS）、Nobuo Ogawa 氏（阪大 OB, Scientist / Affymetrix）をアドバイザーに迎え、学生自ら発案した事業コンセプトのプレゼンテーションを行いました。最後に 3 チームのプレゼンコンペを実施し、審査員の投票で選ばれた優勝チームにはスポンサーからの賞品と賞状が、参加者全員には修了証書が贈られました。

最後の打ち上げパーティでは、学生・教職員・アドバイザーが一緒になって、夜遅くまで、お互いの健闘と献身的な努力を労い合って別れを惜しみ、翌朝、新咸臨丸 1 期生たちは全員無事に渡米前より元気に帰国の途につきました。

創立 80 周年の本年、新咸臨丸プロジェクトへの、元氣一杯の学生さんたちの参加を期待しております。

同済大学

Tongji University



2010年の半年間6ヶ月にわたって世界の耳目を集めた上海万博（中国語では“上海世界博覧会”）は同年10月30日に幕を閉じました。その終幕まで残すところあと数日となった10月21日に本学の上海教育研究センター開所記念式典が開催され、翌22日には本学と同済大学との間に大学間学術交流協定および学生交流覚書が締結されました。もともとは本学医学研究科と外国語学部との間に部局間協定が結ばれていましたが、両部局と言語文化研究科の協力により、同済大学は中国の大学として第10校目の大学間協定校となりました。



「同済」というこの名前は、古代兵法書としても知られる漢籍『孫子』九地篇に典故を持つ成語“同舟共済 tong2 zhou1 gong4 ji4”に由来しています。「同じひとつの舟に乗り合わせた者どうし共に助けあう」という意味です。同済大学のロゴマークにも、ひとつの小舟に乗り合わせた人びとが力をあわせて櫂をこぎながら荒波に立ち向かってゆ



く姿が描かれています。

同済大学の原点は、ドイツ人医師によって1907年に上海で創立された“同済徳文医学堂”に遡ることができます。爾来100年を超える長い歴史を有し、現在では中国教育部（文科省に相当）直属の国家重点大学として、理学、工学、医学、文学、法学、哲学、経済学、経営学、教育学などの分野の下に多数の学部、大学院、研究所をもつ研究型総合大学となっています。特に建築や都市工学などの分野では、北京の清華大学と並ぶトップレベルにあり、上海万博においても様々な分野で同済大学がサポートをしたことが知られています。また、伝統的にドイツを中心とするヨーロッパ各地の大学と深い交流を持っていましたが、近年は日本やアメリカとの学術交流を進め、国際化を幅広く進めています。

なお、同済大学には地下鉄でアクセスできる四平路メインキャンパスなど、上海市内外にあわせて四つの巨大なキャンパスがあり、私達との交流を待っています。

（コンタクトパーソン・古川 裕 言語文化研究科教授）

ウェブサイト：<http://www.tongji.edu.cn/>

編集後記

新年明けましておめでとうございます。今さらではありますが、総長年頭所感の1月号では編集後記のスペースがありませんでしたので、このタイミングになってしまいました。今年もどうぞ阪大NOWをよろしく願いいたします。

さて、創立80周年の年を迎え、記念式典以外にも多くの取り組みが進められています。自動車やバイクで通勤・通学される方は新年度の入構証に注目です。お洒落な80周年デザインが目を引きそうです。

（柿木）

スペイン舞踊研究部AI Compás

リズムを感じて、リズムにのって



みなさんはフラメンコと聞いてどんなイメージをお持ちですか。パラをくわえて激しく足打ちをする情熱的な踊りでしょうか。実はフラメンコは踊りだけでなく唄とギター、手拍子とが一体となってはじめて形になるものなのです。フラメンコは元々、ヒターノと呼ばれるジプシーたちが生み出した芸術で、その唄や踊りには苦しみや喜びなど様々な感情が込められています。日本人の私たちがそれを感じ取るのは難しいですが、知れば知るほど奥が深く、おもしろみがあります。

そこでフラメンコを表現するときに私たちが大切にしているのは、フラメンコ独特のリズムを感じることです。フラメンコにはコンパスと呼ばれる独特のリズムがあり、部の名称の「アル・コンパス」にも「リズムにのって」という意味が込められています。そしてもうひとつは、フラメンコを通して自分を表現することです。先程述べたように、フラメンコは元々日本とは異なる風土で発展してきたもので、私たちにとって未知の世界です。しかしそれを自分なりに表現することでそれぞれのフラメンコが生まれてくると思うのです。そのような意味で、フラメンコは自己表現



の一つの方法だと考えています。

みなさんにとってフラメンコはあまり親しみのないものだと思います。私たちは大学祭はもちろん学外でも公演をおこなっているので、少しでも興味をもたれた方はぜひ私たちの発表を見に来てみて下さい。一度フラメンコの魅力に触れたらハマってしまうこと間違いなしです。



部長 山本 茜(外2年)

コメント

私たちの部は部員数は少ないですが、その分仲が良く、先輩・後輩に関係なく一緒に楽しんで活動しています。2011年は出演するイベントも多数あるので、もっとフラメンコを広めていきたいです。



練習場所：箕面キャンパス 福利会館 2F
練習日時：火・水・木曜いずれか 18時～20時半
土曜 10時～16時
部員数：18人
連絡先：tango_de_malaga@yahoo.co.jp
ホームページ
www.geocities.jp/osakagaidai_alcompas

トピックス

大阪大学卒業生の集い(東京)を開催しました

12月17日(金)に「大阪大学卒業生の集い」を学士会館(東京・神田)において開催しました。

これまで、本学ではホームカミングデイを毎年5月のいちよう祭と合わせて開催し、卒業生の方々を母校にお招きしていましたが、多くの卒業生がご活躍されている関東圏に在勤、在住の方々からの強い呼びかけに応え、今回が2回目の開催となりました。

本学からは鷲田清一総長をはじめ、役員、研究科長が参加し、様々な世代から多くの卒業生の方々にご参加をいただき、参加者数は250名を超える盛況となりました。

第1部では、鷲田総長による主催者代表挨拶及び近況報告に続き、卒業生講演として藪中三十二氏(前外

務省事務次官、野村総研顧問)から『国際社会のなかの日本、その課題と展望』と題し世界情勢と日本の関係についてご講演いただきました。

会場を移し、第2部交流会が催され、熊谷信昭元総長(同窓会連合会会長)による挨拶、福渡 靖氏(医学振興銀杏会東京支部長)による乾杯のご発声が行われました。会場では名刺交換や在学中の思い出話に花が咲く様子があちらこちらで見受けられ、世代を越えた卒業生相互の交流を深めるとともに、あらためて母校の発展を祈念する機会となりました。

また、OBの方々による大阪大学学生歌等の合唱が交流会を盛り上げ、盛会裡に散会となりました。

(企画部広報・社会学連携事務室)



熊谷元総長による挨拶



藪中三十二氏(前外務省事務次官、野村総研顧問)による講演



鷲田総長による挨拶



第1部の様子



第2部の様子



卒業生らとともに

阪大 NOW No.123 2011 2月号

2011年2月20日発行

編集 大阪大学広報・社会学連携室
発行 大阪大学企画部広報・社会学連携事務室 〒565-0871 大阪府吹田市山田丘 1-1
TEL : 06 (6879) 7017 FAX : 06 (6879) 7156
ホームページアドレス <http://www.osaka-u.ac.jp/>

「阪大NOW」へのご意見、お問い合わせにつきましては、下記までお寄せ下さい。
E-mail : ki-kousyagaku-kouhou@office.osaka-u.ac.jp